HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	両面石器リダクションの事例（1）: 札滑型細石刃核に関連する石器群
Author(s)	長沼, 正樹
Citation	論集忍路子, 2, 125-150
Issue Date	2008
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59225
Type	article
File Information	naganuma-Oshorokko-2.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

長沼正樹 / 論集忍路子 II (2008) 125-150

両面石器リダクションの事例（1）
－札滑型細石刃核に関連する石器群－

長沼 正樹

【要　旨】 北海道と本州島に所在する札滑型細石刃核をもつ石器群を比較した．北海道の石器群として，札滑型細石刃核を限定して組成し，両面石器リダクションによる剥片石器への素材供給だけが現れている上幌内モイ石器群と，複数の細石刃核型式や剥片石器への素材供給が複合して見える札滑石器群を設定した．本州島に所在する遺跡群として，“硬質頁岩”の選択的な利用と荒屋型彫器に特徴付けられる荒屋石器群を設定した．調査事例の多い荒屋石器群を検討し，“硬質頁岩”の産出地からの距離によって，遺跡に残される両面石器の大きさ，リダクション段階，遺跡の規模が異なることを導いた．この結果を上幌内モイ石器群および札滑石器群の遺跡と比較した結果，北海道と本州島の札滑型細石刃核に関連する遺跡群には，石材の節約性を高めた表現型と，石材獲得地付近で発現する表現型がともに見られることから，機会限定的な石材獲得と長距離移動という，同型の行動形態によって生じた可能性を指摘した．

キーワード：札滑型細石刃核　リダクション　北海道　本州島　荒屋石器群

I. はじめに

北海道[1]に分布する細石刃核型式のうち，本州島でも多数検出されているのは札滑型である．本州島には白滝型は少なく，忍路子型や広郷型，峠下型や蘭越型の典型例は報告されていない[2]．札滑型細石刃核に関連する石器群は，細石刃の時期[3]の北海道と本州島の比較という課題に，現時点で取り組める対象といえよう．小稿ではこの札滑型細石刃核の石器群を採り上げ，小特集の上幌内モイ遺跡を手始めに北海道と本州島を比較する．更新世終末期の両面石器群（長沼，2002，2003a，2003b，2004）の事例研究であり，更新世終末期の人類活動をめぐる諸問題の一端を検討することが目的である．

II. 議論の前提

（1）石器資料の性格と同時の階層性

個別の一遺跡に残された石器群は，実際の製作と使用の一部にすぎない（加藤・桑原，1969；加藤，1970）．一方で遺跡には，異なる人々が同じ土地をくり返し利用した痕跡の重ね書き，埋没過程でうける凍結擾乱や生物擾乱など，長い年月の多くの出来事が積み重なっている．また人が石を割る行為は最短なら数秒で終了する．遺跡で確認できる石器集中は，一部に人々の石割り行為の痕跡を含むと考えてよい．しかし石器集中としてとらえた現象の中には，一個人による数秒から数時間程度の短い時間から，後で来た人による再利用－数年後から数百年・数千年後の人が，地表に落ちている先人の石器を拾って割る－まで，さまざまな時間幅で形成された結果を含んでいる可能性がある．

その一方で，石器の型式や製作技術などの違いに基づく編年は，おそらく数百年から数千年程度の時間幅は同時となる程度の分解能であろう．^{14}C 年代は，たとえその方法自体がどれだけ高精度化しようとも，

受付：2007 年 1 月 31 日，受理：2008 年 2 月 12 日

※明治大学校地内遺跡調査団　〒 183-0005　東京都府中市若松町 5-6-1 明治大学校地内遺跡調査団事務所
E-mail : mngnm@grape.plala.or.jp

石器と炭化物など測定試料との共伴を原理的には保証しにくい．石器自体を測定試料とする黒曜石水和層年代が期待された頃もあったが，測定例が多数蓄積された今日では測定値のばらつきが大きい．

このように吟味してみると，遺跡や石器が実際に生成した時間幅と年代学的に有意な精度の時間幅との対応が，そもそも見えているわけではなさそうである．いいかえると，石器の型式学的編年の細分や遺跡を最小の活動痕跡単位へ分解するといった方針には，同時の階層性（小野，2001，2006）と年代学の確度の点で突破しにくい限界がある．そこで実践的な研究戦術として，ある程度幅のある時間幅の中でも一定のパターンを石器資料から抽出できるなら（阿子島，1997；髙倉，1999），これを有意な研究対象と仮定して扱うことにする．

（2）用語について

1）行為痕跡と遺跡：過去の人々の行為のうち痕跡として地に残ったものがある．この痕跡が，先述したような履歴を重ねて変形した結果が遺跡である（髙倉，2005a；野口，2005 など）．ひとつの遺跡は現在の確かな事実であるが，一連の行為痕跡が分断・変質した過去の断片にすぎない．過去の人々の行為を考えるには，複数遺跡の比較，年代測定，植生復元，遺跡形成過程論，中範囲理論をはじめ，その他いくつもの研究路線をたぐる必要がある．小稿はこれらのうち複数遺跡の比較に限定した取り組みである．

2）技術構造と表現型：人々が石を割って道具として作り使う行為を遂行した際に，従った規則の全体を石器の技術構造とする．これは直接には観察できない．しかし遺跡には技術構造が生み出した結果の一部が，石器という観察可能だが断片的な姿で現れている．器種組成，石材組成，石器集中など定性的に分類できる諸現象や，点数，計測値など定量化できる諸現象の観察を通して石器群の特徴を把握できる場合，これを表現型とする．技術構造と表現型は，いくつもの表現型から帰納して技術構造をモデル化する，あるいは措定した技術構造モデルから演繹して個別の表現型を説明する関係にある．モデル（理念型）は経験的データ（いわゆる実資料）に開かれ，不断に改良されることで過去の実体に漸近してゆくと考える．技術構造はモデルであり，表現型は経験的データである．

3）両面石器：表裏が平坦剥離で覆われて両面体を呈する，すべての石器を両面石器と定義する．筆者は「両面調整石器」の語を用いてきたし，「両面加工石器」の語を用いる論者もいるが，ともに biface の訳語であるので，以後は両面石器とする．石器を説明するためには，①時空間的広がりとその変化をとらえる指標（index）としての目的（型式 type），②道具としての用途を考える（器種 form），③石核や剥片といった製作工程の把握など，目的の違いに応じた異なる基準が併用されている．両面石器はこれらに加えて，④石材運用に着目する試みである．石材運用とは，食糧資源の空間配置に規定された集団の移動範囲，その中で石を持ち運べる数と量の限度，想定される必要な刃部の長さと質，石器に適した石の偏在という矛盾する事情を，どのように調整したかの方策である．両面石器は，一つの石器が剥片石器の素材供給と利器を兼ねた可能性に着目する点で，③で分節した石核とは異なる．以下では，札滑型細石刃核に関連する石器群の石材運用について述べる際に，細石刃核・細石刃核母形を両面石器と呼び，石核を兼ねると想定しがたい小形の剥片素材の石器については，①と②で分節した器種による分類で記載する．

4）リダクション：石が使用される中で縮小する過程と定義する．北米プロセス考古学の紹介では reduction theory が「変形論」と訳されたが（安斎，1990：117），この訳語では縮小という含意が弱い．適切な和訳を考案するまで現状ではカタカナ表記しておく．小稿では，石核の剥片剥離による縮小（core reduction）と，刃部再生など個別器種の縮小（tool reduction）の両者をあわせた広義（長崎，2004）で用いる．両面石器は石核と利器を兼ねる場合もあるため，はじめから石核と剥片（および剥片素材の器種）とを分けて整理する前提は不適切であると考える（長沼，2003b：103-104）．

広義のリダクションは，日本の従来の用語では，「剥片剥離」と「二次加工」の両者からなる「石器製作工程」ないし「石器製作技術」に，「刃部再生」をあわせたものと結果的にほぼ同じ対象を指し示す．しかしリダクションの語を用いる理由は，「特定の形の石器を製作する手順の解明」ではなく，石が打ち割られて小さくなる過程の把握を重視するためである．厳密には個別の一原石ごとにすべて異なる縮小過程を経たはずだが，その中で一定の手順が他から弁別しやすいパターンで高い再現性をもった特殊な場合が，これまで「技法」や「技術型式」などと呼ばれてきたのではないだろうか．

刃部再生には，「再生器具」（大山，1940）や「第3次加工」（橋本，1977）など，北米プロセス考古学とは無関係な着目もあった．だがリダクションと刃部

再生は同じ概念ではない．遊動生活の中でリダクションは「石材産地からの距離，年間の移動経路，石材採取戦略（直接採取，交換，埋め込み戦略），目的とする石器の法量，そして石器のデザインなどさまざまの要因が複合的に作用し決定されている」（長崎，2000：239）．ここで枚挙された要因の具体的な復元は困難ではある．しかしリダクション論の意義は，石を割って使う行為が単に製作者の脳内にある形のイメージ（範型 mental template）を，そのまま物質に実体化する（小林，1967，1984）だけではなく，使用者を取り巻く他律的な事情で変異すること（松本，2003：63-67）も考慮する点にある．広義のリダクションこそ石器現象全般の説明にふさわしい上位概念で，「剥片剥離」や「二次加工」などの諸概念からなる「石器製作工程」などは,「刃部再生」などと同様に，リダクションの中の一部特殊な局面を扱う下位概念として階層的に位置付けられる．つまり「石器製作工程」は，リダクションの特殊な一部であると考える．

リダクションの把握に最も確実なのは，接合資料である．形態学もある程度は有効だが，出土した時点での形にとらわれがちな点に問題がある．もちろん接合資料にも限界はある．接合作業の徹底度や熟練度が整理作業や報告書によってまちまちである．一つの接合個体が必ずしも同一人物による短時間のリダクションの結果とは限らない．遊動生活の中で複数の占拠地にまたがってリダクションが進行したならば，一遺跡の接合資料だけでは全リダクション過程を直接復元することはできない．また現時点で発掘されていない遺跡の存在を考えると，複数遺跡間の完全な接合作業は現実的ではない．そもそも一遺跡の中で多数接合するような個体は，何らかの意味で石割の制御が首尾よくいかなかった，いわば失敗個体を含んでいることも考えられる．こういった限界をもつとはいえ，過程を把握する上ではやはり接合資料がもっとも有効である．そこでリダクションの理解にも,ある程度のモデル化(長沼，2004)・抽象化・一般化が必須となろう．

5）細石刃核型式名と定義

細石刃核型式名と定義は鶴丸俊明に準じる（鶴丸，1979）．ただし鶴丸が提示した時点での変遷観（新旧関係）まで含めて賛同する意図はない．あくまでも形態分類に限定した準拠である．なお鶴丸が言及していない型式名には「美利河型」など「」をつける．

III. 上幌内モイ遺跡

（1）概要

上幌内モイ遺跡は，石狩低地帯南部の東縁，夕張山地から噴火湾に注ぐ厚真川水系の上流域で，小支流の合流点に挟まれた河成段丘上に立地する．それぞれ1ヶ所の石器集中，焼土，炭化物集中を検出した．石器群の包含層（IX 層）は，上を樽前 d（VIII 層），下を恵庭 a（X 層）の指標テフラで挟まれている．石器の出土点数は 1412 点（黒曜石 1054 点，“硬質頁岩” 345 点，瑪瑙 1 点，砂岩 12 点）である．主な器種組成は細石刃 151 点，札滑型細石刃核 3 点，掻器 2 点，彫器 1 点，削器 6 点，錐形石器 1 点などである（図 1）．炭化物粒の AMS による ^{14}C 年代は，14,565 ± 50RCYBP（PLD-5275），14,560 ± 50RCYBP（PLD-5276），14,650 ± 80RCYBP（IAAA-41577）である（厚真町教育委員会，2006）．剥片を素材とする器種と剥片のほとんどは，背面の剥離面構成や打面付近の形状，剥離角の特徴から，両面石器リダクションの過程で生じたものと考えられる．石核や石刃は出土していない．また石器集中の平面分布が狭い範囲にまとまり，細石刃や大形の剥片，細石刃核がよく接合する．焼土・炭化物集中と石器集中が，平面分布上有意なコンテクストにある（中沢，2006）．石器群は焼土と炭化物を形成した焚き火行為の継続と対応する程度の，時間内の行為痕跡であると解釈する．以下の議

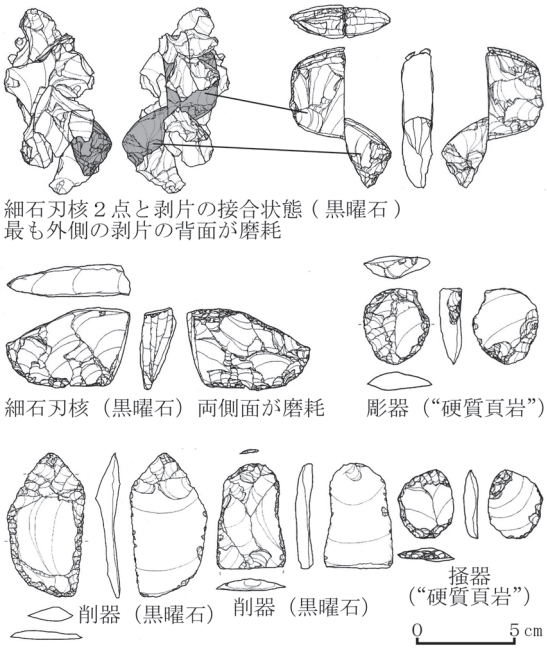


図 1　上幌内モイ遺跡出土の石器［厚真町教育委員会（2006）より一部変更］

論はこの認識を前提とする．

（2）遺跡に残された石材

主要石材は黒曜石と“硬質頁岩”である．重量でも黒曜石は 402.45 g，“硬質頁岩”は 82.40 g と黒曜石の方が多い．一般に，石器の一部に残る自然面（礫面・礫皮面）の状態がわかると，獲得・利用された原石の産状を推定できる．また原石からのリダクションが開始された直後に近いほど，多くの石器に広い自然面が残ると予測できる．上幌内モイ遺跡では報告時に 6 点（赤井，2006），後の細片を含めた再検討をあわせて 10 点の黒曜石に，自然面が確認された．1054 点という出土黒曜石の全点数に比べてわずかである．自然面の状態は岩屑と角礫，円磨の進んでいない転礫で，露頭直下または弱いローリングを受けた産状を示唆する．黒曜石の産地は，16 点の蛍光 X 線分析結果で「所山 III と組成が類似する」とされた（井上，2006）．同文献によると「所山 III」は，露頭として確認されていないグループであるという．一方で肉眼観察では，黒と赤褐色が混じる花十勝が特徴的である．これは（財）北海道埋蔵文化財センターによる白滝遺跡群の調査・報告で，黒曜石 4 ないし黒曜石 5 とされる赤石山で産出する石質（北海道埋蔵文化財センター，2001：口絵 24）に類似する．いずれにしても遺跡の所在する厚真町は，旧白滝村や所山のある置戸町からは約 150km 以上の距離にある．自然面が残る石器が少ないことからも，黒曜石の原石獲得から時間的・空間的に離れた行為痕跡であると解釈できる．

黒曜石製の石器には，細石刃核の側面や，剥片の背面の稜線が磨耗しているものがある．図 1 で，両側面の稜線が磨耗している中段の細石刃核には，側面に剥片類が接合しない．これとは対照的に磨耗のない上段右の細石刃核には，上段左で示すように側面に剥片が接合する．上段左では，外側に接合する剥片の背面稜線が磨耗しており（図の左面の左側縁中央），その面にはこれ以上の剥片は接合しない．この上段の例は，磨耗が運搬時に生じた可能性を示唆する．つまり図 1 上段の細石刃核を中心とする個体は，ひとまわり大きな両面石器の状態で本遺跡に搬入され，運搬の過程で接合状態の最外側にあたる剥片の稜線が磨耗した．本遺跡の中で引き続き連続した器体調整，および削片の剥離ないし両面石器の分割（いずれも両面石器のリダクション）が，実施されたと考えられる．運搬による磨耗という説明は，原石の獲得から離れた行為痕跡とした解釈とも矛盾しない[4]．

一方で“硬質頁岩”には自然面が残る例はない．遺跡付近に分布する第三紀堆積岩に含まれる砂岩や泥岩，“硬質頁岩”は，「貝殻状断口ができるほどの続成作用を受けておらず，剥片石器の石器石材としては利用しがたい」（出穂，2006：118）．剥片石器に適した頁岩類は渡島半島に多く産出する．石狩低地帯を境に北海道南西部では，頁岩類を主体とした石材利用が一般的であり，産地の追求[5]が試みられている（山田，2005 など）．本遺跡で出土した“硬質頁岩”に自然面が残らないことから，やはり黒曜石と同様に，原石の獲得から時間的・空間的に離れた状態にあると解釈しておく．

（3）石材運用の特徴

北海道の北東部は旧石器時代を通じて黒曜石の利用が主体的だが，彫器には頁岩類が用いられる現象が着目されてきた（木村，1995 など）．上幌内モイ遺跡でも黒曜石主体の石器群の中にまじって，“硬質頁岩”の彫器が 1 点と彫器削片が 10 点ある．“硬質頁岩”の剥片の剥離関係による接合では，4 例うち 2 例（接合 19，接合 20）が，両面石器リダクションの過程で生じた剥片と推測できる．本遺跡の“硬質頁岩”のすべてが両面石器に由来したとの断定は困難であるが，“硬質頁岩”の一部も両面石器の形で運用された可能性がある[6]．石材運用の特徴を要約すると，①黒曜石と“硬質頁岩”の併用，②ともに両面石器の形で管理された可能性がある，③ともに原石の獲得地点から離れた状態にある，④遺跡から出土した量は黒曜石のほうが多い，となる．

本遺跡がある石狩低地帯は，白滝や置戸を含む北海道東部山地の黒曜石地帯と，渡島半島の頁岩地帯との中間点にあたる．このような空間位置で黒曜石が“硬質頁岩”より多く出土する．黒曜石産地と頁岩産地をともに行動領域に含む遊動集団が，黒曜石地帯から頁岩地帯へと向かう途上で残した行為痕跡のひとつであると解釈できる．もちろん他の可能性を排除した断定ではない．木村英明は，渡島半島の頁岩を主体とする遺跡でも白滝産黒曜石が少量あることに着目し，地域社会間の交易網，石材流通ネットワークの成立を指摘している（木村，1995）．木村の議論に即して本遺跡を説明することも可能であるし，他にも多様な解釈がありえよう．それらの是非については今後，反証可能な形で多角的に検討されるべきであると考える．

IV. 札滑型細石刃核を組成する石器群

上幌内モイ遺跡の行為痕跡をより踏み込んで説明するために，他の遺跡との比較検討が必要である．小稿

では札滑型細石刃核に関連する遺跡や石器群を以下で論じてゆくが,「上幌内モイ石器群」,「札滑石器群」,「荒屋石器群」の３つに分けて考えることにする.

（１）上幌内モイ石器群

細石刃核では札滑型のみが石器集中にともない，他の型式の細石刃核が出土しない上幌内モイ遺跡のような表現型の遺跡は，北海道には少ない．その場合には彫器や掻器，削器といった剥片石器の素材は，石刃ではなく剥片であることが多い．これらは背面が多方向からの剥離面で構成され，両面石器リダクションの過程で生じる剥片を素材としていると考えられる．

実際の接合資料でも，千歳市オルイカ２遺跡（北海道埋蔵文化財センター, 2005), 函館市石川１遺跡（北海道埋蔵文化財センター, 1988), では, 両面石器（細石刃核母形）が，掻器や削器と接合する（図２上段・下段）．また帯広市上似平遺跡（峠下型細石刃核があるが）でも，札滑型細石刃核を示唆する大形両面石器から削片を剥離した個体に，彫器を取り込む接合例がある（山原，2000）（図２中段）．両面石器が剥片石器の素材を供給したことを証明する接合例である．上

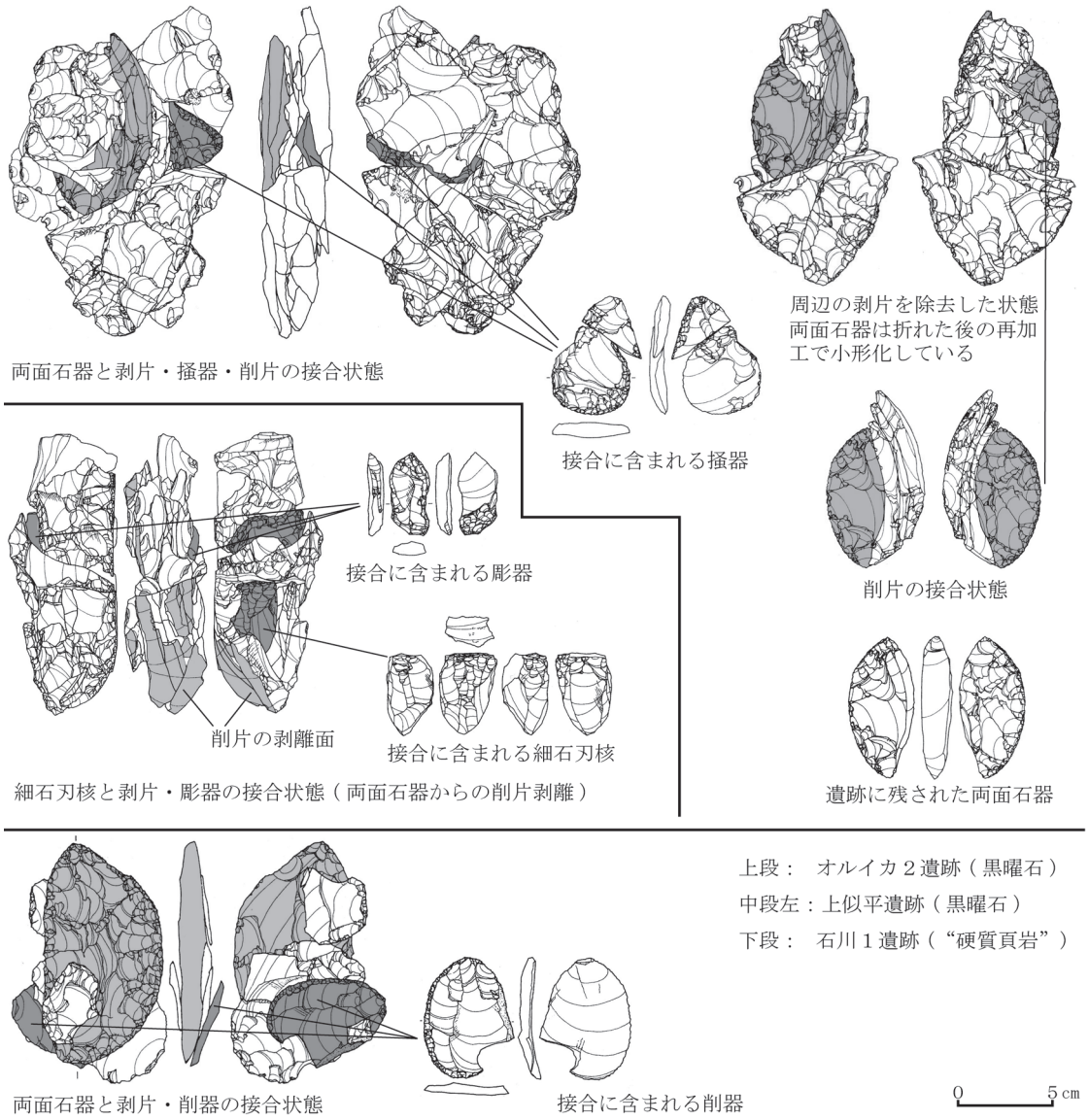


図２　両面石器の接合例［(財) 北海道埋蔵文化財センター（1988･2005)：山原（2000）より一部変更］

幌内モイ遺跡では両面石器との直接の接合こそ未確認だが，彫器，掻器，削器はやはり背面が複数方向からの剥離面で構成される（図１）．石刃石核や不定形石核の利用との併用ではなく，両面石器リダクションの痕跡だけが現れている表現型といえる．小稿では，このような石器群を上幌内モイ石器群と呼び，札滑型細石刃核を単独でもつ北海道の石器群に限定して使用する．報告のある発掘調査例として代表的な遺跡は，上幌内モイ遺跡，石川１遺跡，オルイカ２遺跡である．この他に帯広市暁遺跡のいくつかの石器集中，川西Ｃ遺跡や南町２遺跡などを加えてもよいかもしれない．

（２）札滑石器群

北海道の札滑型細石刃核は，峠下型や幌加型など他型式の細石刃核と「一緒に出土」する場合が多い．共通の技術構造を土台とする細石刃核型式が可視的に現れた表現型なのか，それとも時間をおいて残された行為痕跡の重ね書き・混在なのか．あるいは両者をともに含むのか，そうだとするなら両者を分離できるのか．悩ましい問いだが，①札滑型と呼べる例は細石刃と細石刃核がともに大形である（鶴丸，1979），②峠下型や「美利河型」細石刃核のリダクションが進んで小さくなった状態の一部には，形態学的には札滑型と区別できない例を含む，この２点は経験的に言えそうである．

札滑型と他型式の細石刃核が一緒に出土する，北海道およびサハリン（古サハリン－北海道半島）に所在する表現型を，札滑石器群と呼ぶことにする．加藤博文の「削片系２類」に相当する（加藤，1997）．主な遺跡は，暁遺跡第１地点（帯広市教育委員会，1985，1986，1988；十勝考古学研究所，1989 など），緑ヶ丘Ｂ遺跡（加藤・大井，1961；山田，1999），置戸安住遺跡Ｂ・Ｃ地点（島田・山科，1998），幌加沢遺跡遠間地点（筑波大学幌加沢遺跡遠間地点研究グループ，1990；Kimura，1992；木村，1995，2002，2003 など），上白滝２遺跡 Sb-3 ～ 6・10 石器群（北海道埋蔵文化財センター，2001），ソコル遺跡（Zaitsev et al.2002）などである．編年位置の確定や個別の活動痕跡単位への分離が困難な遺跡，全貌が不明な遺跡が多い．細石刃核型式名の標識地である札滑遺跡は，詳細不明だが広郷型細石刃核が複数出土しており，単純ではない形成過程をへた遺跡である可能性が高い（吉崎，1959；Morlan，1967：183；桑原，1975，1977）．

地表が凍結擾乱を受ける北海道では，石器群の一括性の検証が困難な場合が多い．また研究史の初期に注目され議論の展開に影響を与えた遺跡は，黒曜石の産出地に近い大規模な遺跡が中心であり，個別の遺跡（調査区）から多様で膨大な数の石器が出土した．札滑型細石刃核をもつ石器群も例外ではない．その中にあって，小稿で上幌内モイ石器群として切り分けた一群は，石器群の一括性を比較的とらえやすく見える表現型である．これに対して札滑石器群とした一群は，一括性の評価が困難な表現型をまとめたものである．

（３）荒屋石器群

札滑型細石刃核に関連する遺跡の調査例は本州島に多い．札滑型細石刃核に関連し，“硬質頁岩”（文献によっては珪質頁岩などとも表記されるが統一，以下同様）の単相的な石材利用で，本州島に分布する表現型に限定して荒屋石器群と呼ぶことにする．「北方系削片系細石器石器群」（佐藤，1992）や，「北方系細石刃石器群」（佐野，2002）から，“硬質頁岩”によらない例を除いた一群に相当する．永塚俊司の「荒屋系石器群」（永塚，1997），佐野勝宏の「Ｍ１」（佐野，2003）とほぼ同じだが，表記を統一するために「系」の語を削除する．「細石刃核の製作」途中で生じる削片や剥片を，彫器など他の器種の素材にあてる石器製作の特徴が指摘されている（大塚，1968；剣持，1979；橋本，1988；桜井，1992；佐藤，1995；永塚，1997；佐野 2002，2003 など）．筆者の議論もこれを継承しているが，「細石刃核の製作」ではなく，両面石器のリダクションと読み替える．この技術的な特徴は札滑石器群および，先に図２で具体例を示した上幌内モイ石器群にも共通する（山田，1986；山田・白石，1990a，1990b；白石，1993b；加藤；1996a，1997；山科，2004 など）．荒屋遺跡で 16 例の AMS 年代 14,050 ± 110 RCYBP（GrA-5701）から 13,700 ± 290 RCYBP（GrA-5716）がある（暦年未較正）（北川，2003）．

上幌内モイ石器群・札滑石器群・荒屋石器群の三者は，等価な分類ではない．それぞれ異なる「集団」が残したとか，「編年上の時期」が異なると考えているわけでもない．むしろ上幌内モイ石器群と荒屋石器群は，それぞれ札滑型細石刃核を組成する石器群から派生した，部分的な表現型であると想定している．これに対して札滑石器群は，より石材運用の変異の全容が発現している状態や（加藤，1996a，1997），異なる集団や時期も含む複数回の活動痕跡が重ね書き・混在した状態など，いくつかの事情が織り込まれている可能性を想定している．札滑石器群と上幌内モイ石器群は，あたかも本州島の荒屋石器群の「故郷」のように

見えるが，荒屋石器群は本州島の，札滑石器群と上幌内モイ石器群は古サハリン－北海道半島の，それぞれ固有の環境資源構造（特に石材環境＝良質岩種産出地の空間配置）に適応した地域色と理解しておく．これら三つの石器群は，基本的な石材運用やリダクションの進め方を共有しつつも，地域毎の環境特性や，遺跡の形成過程の違いなどによって，可視的な現れ方には，共通する部分と異なる部分があるのではないだろうか．

以下では類例の少ない上幌内モイ石器群や，評価の困難な札滑石器群を理解するための比較資料として，調査例が多く資料と研究の蓄積が進んでいる本州島の荒屋石器群を検討する．その後で荒屋石器群を補助線として，あらためて上幌内モイ石器群や札滑石器群に論及しよう．

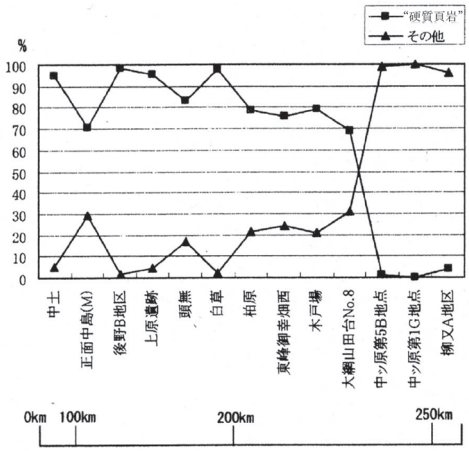


図 3　"硬質頁岩"の組成率（点数比）と"硬質頁岩"分布域からの距離［佐野（2003）一部変更］

V. 本州島の荒屋石器群

（1）先行研究

1958 年に調査された荒屋遺跡の石器群は，「舟底形石核」「荒屋形彫刻刀」が特徴的とされた（芹沢，1959）．矢出川遺跡の調査直後で，同じ細石刃の石器群ながら荒屋遺跡の石器は矢出川遺跡とは異なっていたことから，その系統が北に探られてゆく．「荒屋形彫刻刀」の類例を探る問題意識に呼応する形で，北海道では「白滝遺跡」の調査が進められ，その中で「湧別技法」の提唱など重要な成果があった（吉崎，1961；白滝団体研究会・地学団体研究会，1963）．本州島では，1964 年調査の中土遺跡（中村，1965）と 1970 年調査の角二山遺跡（上野・加藤，1973；剣持，1979；宇野・上野，1984 など）で，北海道と同じ「湧別技法」を持つ点が注目された．やがて後野遺跡（勝田市教育委員会，1976）を嚆矢に，関東平野にも分布すること，"硬質頁岩"に密接に関連することも判明した．

荒屋石器群には，生業と移動・居住形態に関する研究が多い．内水面漁労に関する生業との説は，遺跡の分布や立地，民族誌例を論拠とする（加藤・松本，1984；橋本，1989；佐藤，1992；桜井，1993；堤，2005 など）．一方で，シベリアの楔形細石刃核遺跡で動物遺存体（＝狩猟対象獣）を検討し，同じ技術組織をもつ荒屋石器群が内水面漁労に専従したとは考えにくい，との指摘もある（加藤，1996a，1996b）．移動・居住形態の研究は"硬質頁岩"への特化を論拠に，日本海側と太平洋側との回帰移動・長距離移動モデルを基調とする（田村，1993；加藤，1996a；稲田，1996；佐野，2002，2003 など）．本州島で先行するナイフ形石器群や尖頭器石器群からの連続をたどれないこともあり，ある時点で「北方」から人々が直接やってきたとの見方が受け入れられている．ここで人々の南進の理由として，気候変動の中でサケ・マス類遡上前線の南下（内水面漁労説）や，日本海側の多雪化（シカ類追跡猟説）といった形で，生業についての議論がかかわってくる．

先の技術的特徴は，石材運搬コストを抑える可搬性重視の石器装備と解釈され（佐藤：1992，1995），異なる生態系や景観を横断する広い地域に拡散した技術（白石，1993a），狩猟対象獣の季節移動に対応した技術（加藤，1996a，1996b，1997）との評価がある．図 3 は佐野勝宏からの引用で，荒屋石器群以外も含む「北方系細石刃石器群」の石材組成（点数比）と，"硬質頁岩"の産出地域からの距離である（佐野，2003）．小稿でいう荒屋石器群ではない中ッ原遺跡群と柳又 A 地区以外は，"硬質頁岩"が 70％以上の高い割合を示し，200km 以上離れた遺跡でも大半が"硬質頁岩"である．

以下では，この長距離移動の内実を具体的に検討する[7]．表 1 は論及する遺跡の一覧である．

（2）石材地域

本州島北半の大地形は，日本海側の丘陵の多い低地，分水嶺の脊梁山脈をなす高い山地，太平洋側北部の低い山地と南部の関東平野である．荒屋石器群の遺跡分布を考える上で，大まかに，日本海側・太平洋側・それらの移行帯として把握する．日本海側は，秋田県・

表１　荒屋石器群の遺跡一覧［主に大場（2003）：立木（2003）：萩谷（2003）：永塚（2003）による］

遺跡名	発掘/採集	隣接河川等	状態	組成（発掘で集中部が調査された遺跡のみ）									遺構
				細石刃核	細石刃	削器	彫器	掻器	削片	礫器	その他	総計	
下堤D	発掘	岩見川	組成あり	2	11	1	2					約250	
狸崎B	発掘	岩見川	組成あり・台形様石器群と混在	1	19	6	6	3	5	2		1778	
富山坂F	採集	月光川	札滑型細石刃核、荒屋型彫器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
鴨子台	発掘		掻器２点など計8点の関連資料				1	2				8	
八森	採集	荒瀬川	神子柴と東山の発掘地点から離れて荒屋型彫器１点	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
山屋B遺跡	採集	戸前川	札滑型細石刃核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
角二山遺跡	発掘	最上川	組成あり	9	1212	6	29	32	31		4	5763	礫群
越中山遺跡群D地点	採集	赤川	札滑型細石刃核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
同　K地点	採集	赤川	荒屋型彫器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
同　M地点	採集	赤川	削片と荒屋型彫器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
同　O地点	採集	赤川	削片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
上野山	採集	赤川	札滑型細石刃核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
弓張平	採集	寒河江川	削片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
月山沢	発掘	寒河江川	神子柴の石器群が主体　札滑型細石刃核は採集	—	—	—	—	—	○	—	—	—	
西覚寺・米沢	採集	寒河江川	削片とブランク	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
金谷原	採集	最上川	札滑型細石刃核と削片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
所部	採集	立合川	削片、角二山掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
名生館	発掘	江合川	荒屋型彫器など６点が出土		1	1	1	1				6	
学壇遺跡群	発掘	阿武隈川	組成あり　他時期石器群と混在	○	○	○	○	○	○			10436	
真野土城跡	採集	真野川	削片１点	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
薬師堂	発掘	阿武隈川	幌加型　ナイフと混在	2	2	○		○				156	
一里段A	発掘	阿武隈川	札滑型細石刃核１点		1							1	
屋敷前	発掘	夏井川	荒屋型彫器２点		2							2	
上ノ山C	採集	加治川	札滑型細石刃核母形１点	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
熊谷内	発掘	加治川	荒屋型彫器１点				1					1	
行塚B	発掘	阿賀野川	荒屋型彫器１点		2		1					3	
中道	採集	阿賀野川	札滑型細石刃核１点	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
大平	発掘	阿賀野川	組成あり、ナイフ形石器群と混在	1	9	5	3	1				29	
鍛冶山	発掘	阿賀野川	古墳盛土から荒屋型彫器２点				2					2	
笹山原遺跡群No.27	採集	阿賀野川	採集だけで荒屋型彫器100以上	○	○	○	○	○	○			多数	
吉野屋	採集	五十嵐川	札滑型細石刃核２点	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
小戸谷	採集	五十嵐川	荒屋型彫器１点	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
藤平	発掘	五十嵐川	細石刃核母形、細石刃、採集で荒屋型彫器	1	○	—	—	○	—	—	—	—	
中土	発掘	五十嵐川	組成あり	4	22	6		9		1	1	79	
瓜割	発掘	信濃川	削片１点、楔形母形１	1					1			2	
天上原A	採集	信濃川	荒屋型彫器１点	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
荒屋（２次・３次）	発掘	信濃川	組成あり、多量の彫器	20	5590	5	626	19	27	2	○	92435	土壙群
月岡	発掘	魚野川	組成あり	6	93	10	14	5	9			378	
上ノ台Ⅰ	採集	魚野川	札滑型細石刃核、荒屋型彫器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
大刈野	発掘	魚野川	組成あり、尖頭器石器群との分離困難	○	○	○	○	○					礫群
愛宕山	採集	信濃川	幌加型（削片のようでもある）１点	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
正面中島	発掘	信濃川	組成あり	1	19	15	11	11	2	1		156	
干溝	発掘	信濃川	幌加型１点	1								1	
屋敷田	発掘	信濃川	荒屋型彫器１、細石刃３		3		1					4	
釜掘川東	発掘	信濃川	荒屋型彫器１				1					1	
小坂平	発掘	信濃川	札滑型細石刃核１点	1								1	
杉久保C	発掘	野尻湖	荒屋型彫器ほか				3	1				4	
大久保南	発掘	野尻湖	削片、削片系細石刃核	1								1	
樋ヶ崎	発掘	野尻湖	“硬質頁岩”の幌加型	1								1	
千苅	発掘	千曲川	札滑型１、稜柱形１、母形２	4								4	
小野平	採集	千曲川	札滑型細石刃核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
押手	発掘	利根川	札滑型細石刃核	1								1	
箱田遺跡群上原	発掘	利根川	組成あり		51	1	2	2	1			183	
鳥取福蔵寺Ⅱ	発掘	利根川	組成あり	○	○	○	○	○	○				
頭無	発掘	利根川	組成あり	1	121	10	9	1	1			425	
落合	発掘	利根川	荒屋型彫器				1					1	
大雄院前	採集	渡良瀬川	札滑型細石刃核、荒屋型彫器など	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
稲荷山Ⅴ	発掘	利根川	札滑型細石刃核	1								1	
強戸口峯山	発掘	渡良瀬川	荒屋型彫器				1					1	
赤羽根	発掘	渡良瀬川	札滑型細石刃核	1	1			1				3	
白草	発掘	荒川	組成あり	1	478	2	21	2	6	1		4416	土壙
中郷	発掘	利根川	削片１点						1			1	
那須官衙関連	発掘	那珂川	荒屋型彫器１点				1					1	
額田大宮	発掘	久慈川	“硬質頁岩”の幌加型と他石器の供伴関係は不明	1	204	8		18	1	1			
後野B	発掘	那珂川	組成あり	4	167	4	7			1		748	
向野No.1	発掘	那珂川	角二山掻器１点					1				1	
東岡中原	発掘	桜川	組成あり、他時期石器群と混在	1		2	7	3	1			41	
原田北	発掘	霞ヶ浦	荒屋型彫器				1					1	
寺畑	発掘	霞ヶ浦	荒屋型彫器				1					1	
柏原	発掘	利根川	組成あり	2	104	1	2				1	243	
聖人塚	発掘	利根川	荒屋型彫器				1					1	
空港No.61	発掘	利根川水系取香川	組成あり	6	14	7	10	9	3			62	
木戸場Ａ地点	発掘	高崎川	組成あり	2	3	11	9	7				102	
高岡遺跡群大山	発掘	高崎川	札滑型細石刃核	1	3	1	1	2				11	
高岡遺跡群大福寺	発掘	高崎川	札滑型細石刃核	1					1			2	
間野台貝塚	発掘		荒屋型彫器		2	1	1					4	
木戸先	発掘	鹿島川	札滑型細石刃核、草創期石器群と混在	2	1		2					5	
和良比	発掘	鹿島川	荒屋型彫器	3			3					6	
大網山田台No.8	発掘	南白亀川	組成あり	2	34	9	9	7		1		175	

山形県から新潟県北部,福島県西部の山間部を中心に,“硬質頁岩”の獲得が相対的に容易な地域である．太平洋側の遺跡から出土する“硬質頁岩”が，すべて日本海側の山間部で獲得されたと断定することはむずかしい．しかし今のところ太平洋側では，日本海側に匹敵する質と量の“硬質頁岩”産出地は確認されていない．移行帯の群馬県・栃木県・茨城県などの山地や丘陵では多様な頁岩類が産出し，後期旧石器時代を通じて石器石材に利用されている．しかし，これらは日本海側産の“硬質頁岩”とは一見して異なるし，荒屋石器群ではほとんど用いられていない．

人々の移動経路を規定した可能性のある，高い山地や大きな河川などの配置も考慮し，以下の地域区分を行う．A 地域＝“硬質頁岩”の産出地を域内に含み石材入手が相対的に容易と考えられる範囲（脊梁山脈以西の日本海側）．C 地域＝“硬質頁岩”産出地から遠く離れ相対的に石材入手が困難と考えられる範囲（脊梁山脈以東で山麓から離れた関東平野）．B 地域＝中間の範囲（脊梁山脈以東で，脊梁山脈の山麓や関東平野北部の低い山地・丘陵に隣接する地域）．

図 4 は地域ごとの遺跡分布である．ここでは単純に分布を問題とするだけなので，表面採集資料のみの遺跡も含めた．もっとも遺跡数が多いのは A 地域である（40 遺跡）．それが B 地域は 21 遺跡，C 地域では 13 遺跡と，“硬質頁岩”獲得が困難と考えられる地域に離れるほど，遺跡数が減少する．各地域の面積がひとしくないことや，調査頻度等の影響を考慮する必要はあるが，相対的に開発機会＝発掘調査事例の多い関東平野で遺跡が少ないことから，おおむね有意な傾向と考えてよいと判断する．

（3）両面石器のリダクション進行と遺跡分布

1）両面石器の大きさ

荒屋石器群の両面石器はリダクションを経て細石刃核になる．以後は文脈に応じて「両面石器＝細石刃核」とも呼ぶことにする．図 5 に引用した絹川一徳によると，日本海側ほど両面石器＝細石刃核が大きく，逆に太平洋側や中国地方では小さい（絹川，1996）．この傾向は，資料の蓄積が進んだ今日でも大きな変更の必要はない．“硬質頁岩”の獲得が容易な地域では両面石器は大形だが，移動行路の中でリダクションが進行し，日本海側から離れると，遺跡に残る両面石器は小さくなるとの見通しが立つ．

この見通しをより具体化するために，両面石器＝細石刃核の長さと幅を計測して，石材獲得地からの距離との相関を検討する．削片[8]も完形品ならば剥離された時点での両面石器の長さを反映すると考え，完形品の長さのみ計測する．いずれも接合で元の大きさが復元できる場合は，接合状態で計測する．削片が剥離されていない両面石器は最大長を長さ，これに直交する方向での最大長を幅とする．削片剥離後の両面石器は，削片の剥離面と最も平行方向に近い最大長を長さとし，これに直交する最大長を幅とする．すなわち通常「細石刃核の高さ」とされる部位を,「両面石器の幅」として計測することになる．実測図が公表されているものは実測図から，いないものは実物資料から計測した．両面石器は 31 遺跡 85 点，削片は 20 遺跡 43 点である．

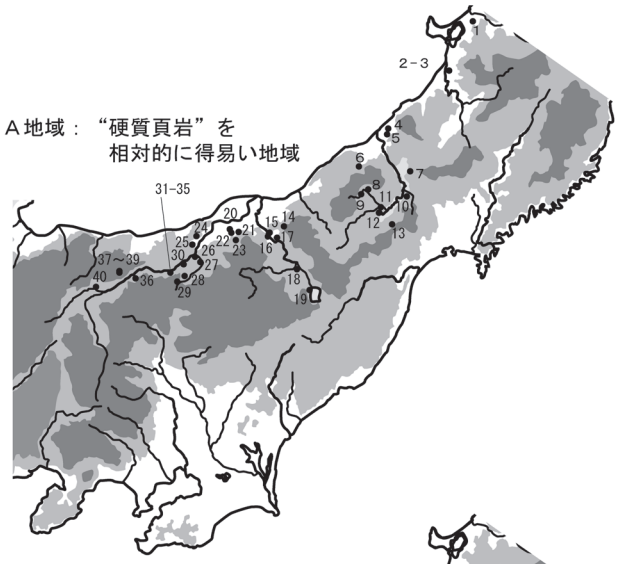
図 6 は各項目の計測値である．横軸の遺跡は，仮に山形県南部山間地とした“硬質頁岩”獲得地からの相対的な距離の順に並べた（以下同様）．両面石器の長さ（上段）では，大半が 5-10cm の範囲にまとまる中で，17-18cm の最大値や 10cm を超える大形品は石材獲得地の近く（図の左側）に，2 -3cm の最小値は石材獲得地から遠く（図の右側）にある．石材獲得地の近くにも 5cm 以下の小形品は存在するが，これは細石刃の剥離が進行した細石刃核を反映している．

両面石器の幅（中段）は，全体が 2 - 5 cm の範囲に集中する．削片を剥離された状態での両面石器の幅（＝細石刃核の「高さ」）は，平均的にこの程度の大きさとなるのであろう． 5 cm 以上の大形品は図の左側にのみ表れており，15 番の月岡遺跡より右にはほとんどない．距離との関係は，漸移的な減少ではなく，上限について断続的な形として認めることができる．“硬質頁岩”獲得地の近くでも大形品のない遺跡もある．

削片の長さ（下段）の上限と下限は，上段の両面石器の長さとほぼ重なるが，石材獲得地から離れるほど短くなる傾向は，いっそう顕著といえる．また両面石器の長さでは図の左側でも少ない 10-15cm の範囲に，削片ではより多数が分布している．図の中央付近でも月岡遺跡や愛宕山遺跡など 15cm を超える例がある．この違いは，両面石器の長さでは細石刃剥離の進行が進んだ資料も含まれているのに対し，削片では縦割り時点での両面石器の長さを，より純粋に反映しているためと考えられる．

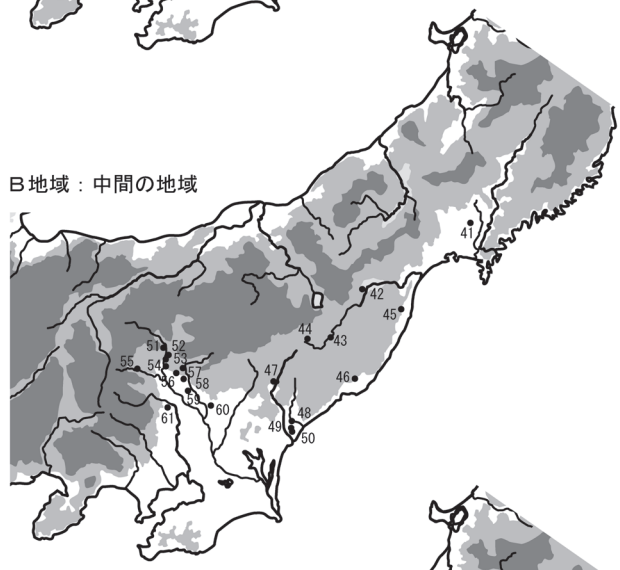
2）石器群全体のリダクション段階

次に彫器や掻器，削器といった剥片素材の器種も含めた，石器群全体のリダクション段階の遺跡間変異を検討する．大塚和義の「荒屋技法の工程」（大塚 1968）をもとに，筑波大学遠間資料研究グループ



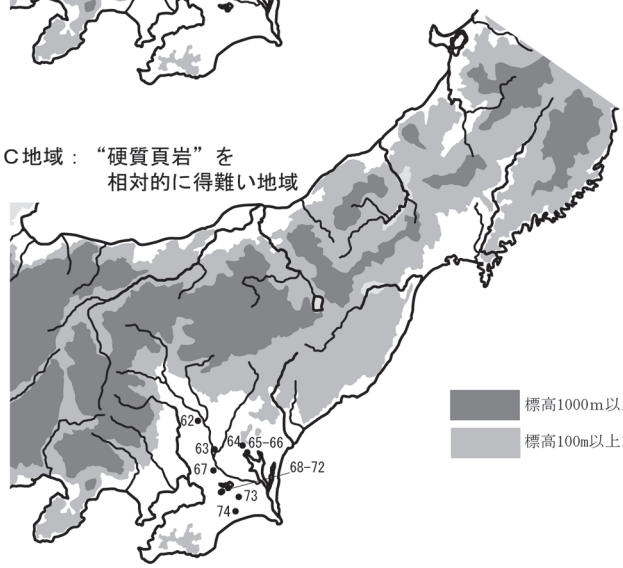
A地域の遺跡群

1：鴨子台
2：下堤D
3：狸崎B
4：宮山坂F
5：八森
6：越中山遺跡群
7：山屋B
8：弓張平
9：月山沢
10：角二山
11：西覚寺・米沢
12：金谷原
13：所部
14：上ノ山C
15：行塚B
16：中道
17：大平
18：鍛冶山
19：笹山原遺跡群
20：吉野屋
21：小戸谷
22：藤平
23：中土
24：瓜割
25：天片原A
26：荒屋
27：月岡
28：上ノ台I
29：大刈野
30：愛宕山
31：干溝
32：正面中島
33：屋敷田
34：釜掘川東
35：小坂平
36：千苅
37：樅ヶ崎
38：杉久保C
39：大久保南
40：小野平



B地域の遺跡群

41：名生館
42：学壇遺跡群
43：薬師堂
44：一里段A
45：真野土城跡
46：屋敷前
47：那須官衙関連
48：額田大宮
49：後野B
50：向野No. 1
51：押手
52：箱田遺跡群上原
53：鳥取福蔵寺II
54：頭無
55：落合
56：稲荷山
57：馬見岡
58：大雄院前
59：強戸口峯山
60：赤羽根
61：白草



C地域の遺跡群

62：中郷
63：柏原
64：東岡中原
65：原田北
66：寺畑
67：聖人塚
68：和良比
69：木戸場
70：木戸先
71：高岡大山
72：間野台貝塚
73：東峰御幸畑西
74：大網山田台No. 8

図4　石材地域ごとの遺跡分布

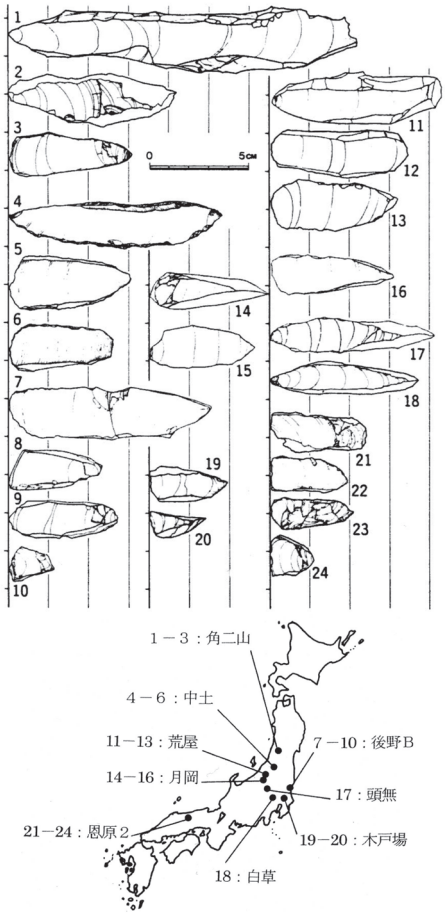


図 5　荒屋石器群における細石刃核の大きさの変異［絹川 (1996) に分布図を添付］

（山田・白石，1990a，1990b）と桜井美枝（桜井，1992）を参考に，各地の資料を実見する中で筆者が得た知見も加えて，以下の段階 I から IV を設定した．

段階 I（図 7）は両面石器の準備である．削片剥離のない両面石器を本段階とする．この状態の両面石器が遺跡に残ることは稀である[9]（永塚，1997：105-106）．また図 7 に示した例には小形のものも含むが，次に示す削片が剥離された状態の両面石器や削片の大きさから推定して，より大形の両面石器が一般的であった可能性が高い．削器・彫器・掻器には段階 I はないものとする．将来的にこれらの器種に加工されることになる剥片類は，一定の厚みや大きさを備えたものとして感覚的な識別はできなくもないが，他の雑多な剥片類から明確に分離できないとの理由による．二次加工を加えない状態で使用された可能性もある．

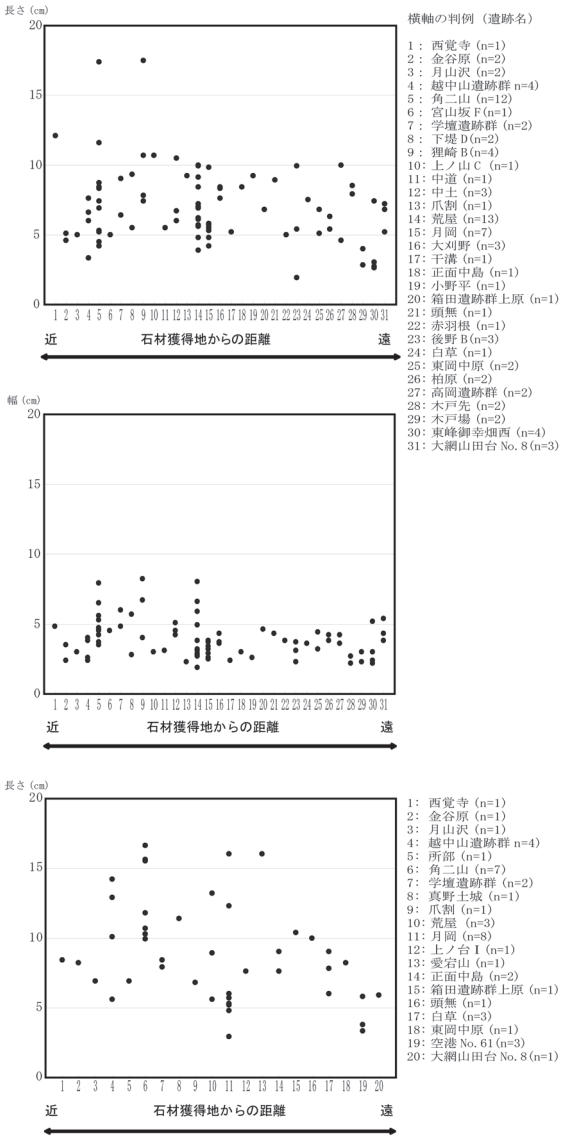
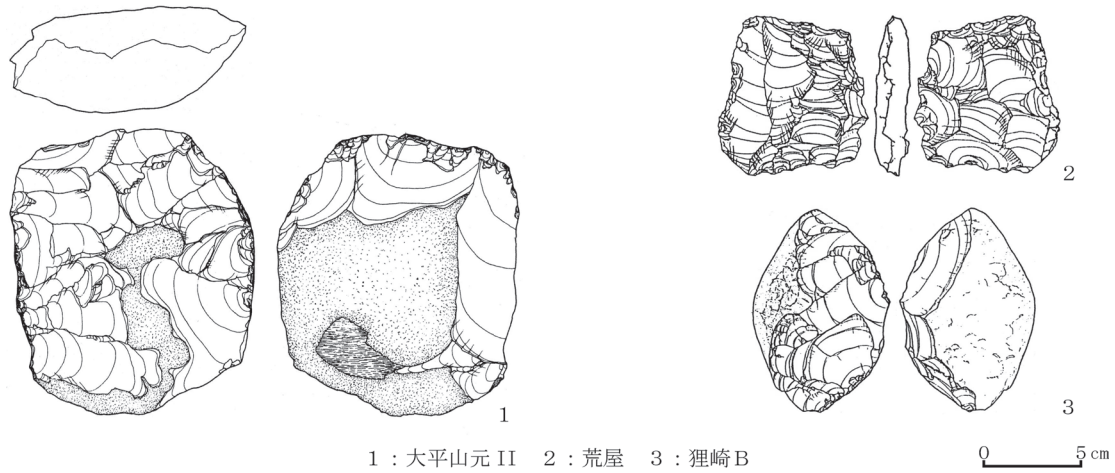


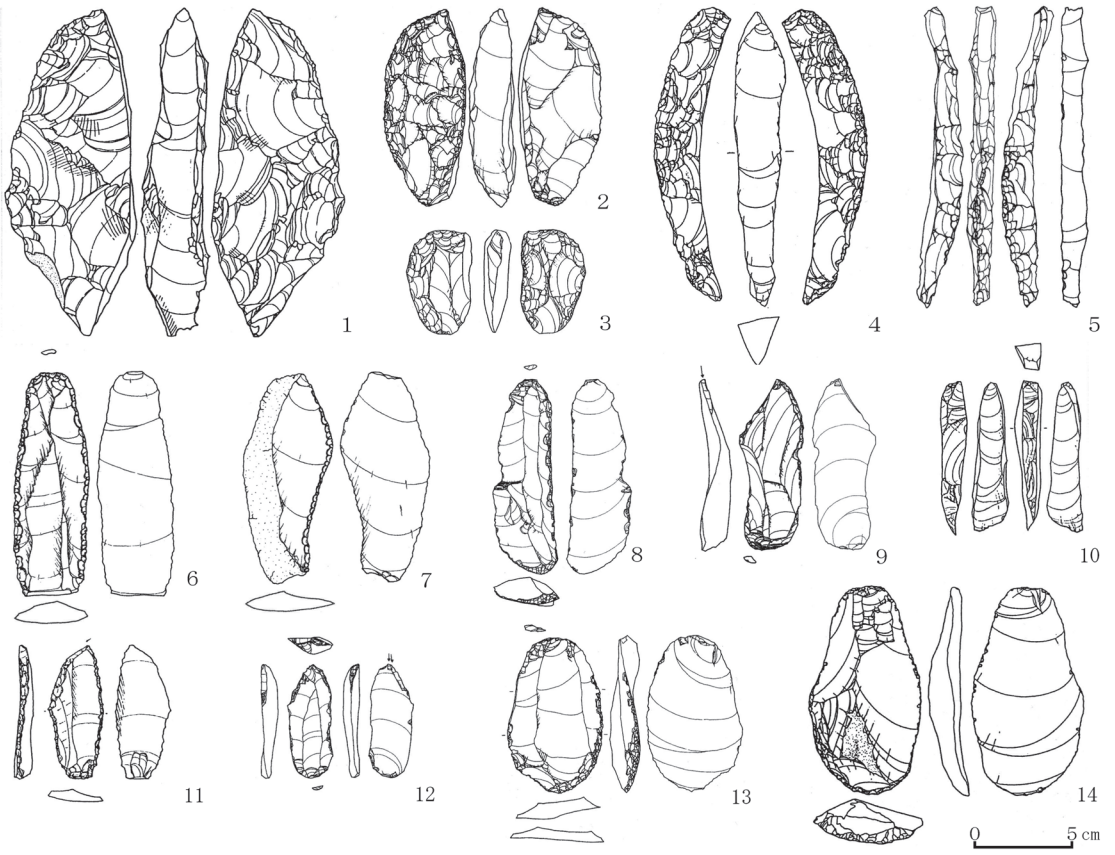
図 6　両面石器と削片の大きさ［上段：長さ　中段：幅　下段：削片の長さ］

段階 II（図 8）では，両面石器と剥片に一定の形が与えられる．両面石器は，削片を剥離してはいるが細石刃の剥離が開始していない状態とする（図 8 の 1-3）．二次加工や転用のない削片も段階 II とする（図 8 の 4-5，10）．つまり削片にも段階 I はない．削器・彫器・掻器は，弁別的な二次加工を加えられて分化する．削器と掻器では二次加工の強度（二次加工単位の大きさと深さ）が弱い（二次加工単位が小さく浅い）



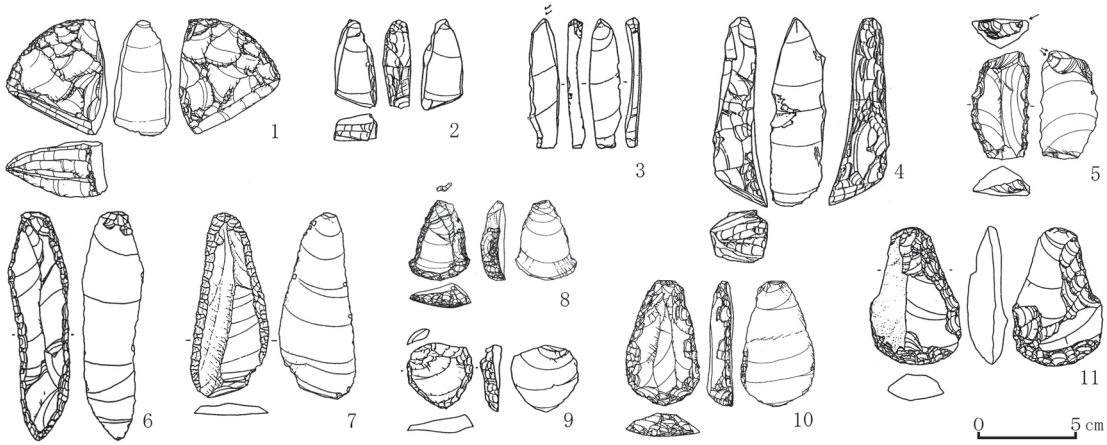
1：大平山元Ⅱ　2：荒屋　3：狸崎B

図7　リダクション段階　段階Ⅰの石器［織笠（1979）：蟹田町教育委員会 (1992)：秋田市教育委員会（1993）より一部変更］



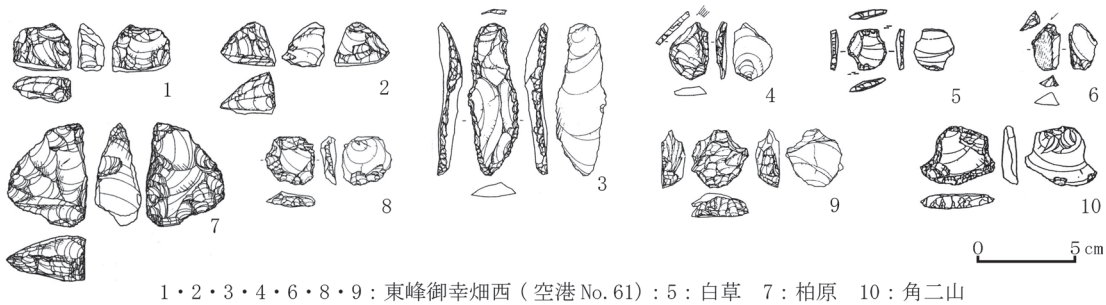
1・4・14：角二山　2・13：中土　3：中原　5・6・7：月岡　8・9・12：正面中島　10：白草　11：荒屋

図8　リダクション段階　段階Ⅱの石器　［剣持（1979）:東北大学考古学研究室 (1990):桜井（1992）:埼玉県埋蔵文化財調査事業団（1993）新潟石器研究会（1996）：茨城県教育財団（2000):津南町教育委員会（2002）より一部変更．月岡は原図筆者］



1・10：中土　2・4：後野B　3：月岡　5・8：正面中島　6・11：角二山　7：白草　9：木戸場

図 9　リダクション段階　段階Ⅲの石器［勝田市教育委員会 (1976)：中村ほか (1984)：千葉県文化財センター（1987)：桜井（1992)：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 (1993)：新潟石器研究会 (1996)：津南町教育委員会 (2002) より一部変更］



1・2・3・4・6・8・9：東峰御幸畑西（空港 No. 61）：5：白草　7：柏原　10：角二山

図 10　リダクション段階　段階Ⅳの石器［桜井（1992)：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 (1993)：茨城県教育財団 (1999)：千葉県文化財センター (2000) より一部変更］

ことを基準に段階 III から区別する．削器は石刃や大形の縦長剥片を素材とする例が多い（6-8)．彫器は大形である点，彫刀面の樋状剥離が少ない点，周辺への二次加工が微弱である点で次の段階 III から区別する（9・11・12)．彫器の素材には，削器に比べると薄手・小形の石刃状の縦長剥片や（11・12)，背面が多方向からの剥離面で構成される剥片がある（9)．

段階 III（図 9）は細石刃の剥離や各器種の刃部再生が進む段階である．刃部再生の反復で素材の形状が大きく変化した資料がこの段階を特徴づける．両面石器＝細石刃核は細石刃の剥離が進み（1)，削片には二次加工や転用が認められる（2・3・4)．削器は二次加工が深く入り（7)，細身になる（6)．一度折れて再生したのか，長さが縮む（9)．彫器は複数の樋状剥離が繰り返し入る（5)．掻器は二次加工が腹面にまで入る例や長さが著しく縮む例がある（8・10・11)．

段階 IV（図 10）はリダクションが進行した結果，石器の法量が著しく減少した状態である．両面石器＝細石刃核は細石刃の剥離が限界まで進み（1・2)，他器種に転用される（7 は掻器に転用された例)．削器（3）や掻器（8・9・10）も，著しく小形化する．彫器や掻器では素材剥片自体が，おそらく小形化した両面石器から生じたと考えられる，薄手・小形の剥片を素材とするものも含める（4・5・6)．

分析は各遺跡出土の両面石器＝細石刃核，削片，削

表 2　リダクション段階別の出現頻度（%）と石材獲得地からの距離

石材獲得地からの距離（近→遠）	遺跡名（点数）	段階 I（リダクションの進行）	段階 II	段階 III	段階 IV	
近	角二山（n=76）	0	42.1	53.9	3.9	A地域
	下堤D（n=5）	0	80.0	20.0	0	
	中土（n=12）	0	58.3	33.3	8.3	
	荒屋（n=513）	0	37.8	57.1	4.6	
	月岡（n=54）	1.9	46.3	40.7	11.1	
	正面中島（n=40）	0	50.0	42.5	7.5	
	大刈野（n=9）	11.1	44.4	33.3	11.1	
	後野B（n=14）	0	7.1	78.6	14.3	B地域
	頭無（n=13）	0	78.6	14.3	7.1	
	白草（n=31）	0	32.3	58.1	3.2	
	柏原（n=5）	0	20.0	20.0	60.0	C地域
	木戸場A地点（n=23）	0	30.4	45.2	8.7	
	空港No.61（n=33）	0	39.4	33.3	27.3	
遠	大網山田台No.8（n=27）	0	48.1	51.9	0	

器，彫器，掻器を検討し，各石器がどの段階かを判断して点数を求める．次いで器種の枠を取り払って段階ごとの総点数を求め，検討した石器の総点数との割合から出現頻度を計算する．出現頻度（%）＝段階ごとの総点数（点）／検討した石器の総点数（点）×100 である．検討対象とした安定した組成をもつ 14 遺跡の結果が，表 2 である．縦軸の遺跡は石材獲得地からの順に並べてある．リダクション段階ごとに集計して割合（%）で示した．

段階 I と段階 II との合計が段階 III と IV の合計を上回る遺跡を，リダクション段階の「前半型の遺跡」とよぶことにする．逆の遺跡を「後半型の遺跡」とする．これに従うと前半型の遺跡は下堤 D，中土，大刈野，頭無であり，後半型の遺跡は角二山，後野 B，白草，木戸場 A 地点，空港 No.61 となる．月岡，正面中島，大網山田台 No.8 は前半と後半がほぼ同率で拮抗する．遺跡によってはサンプル数が少なすぎ，統計的な意味では問題がないわけではない．荒屋遺跡と角二山遺跡は既公表分の実測図資料にもとづいている．大まかには，石材獲得地に近いほどリダクション段階の前半型の遺跡が多く，遠くなると後半型の遺跡が増えるとの傾向を指摘できる．

（4）規模による遺跡類型

加藤博文は，石器の出土点数や想定される遺跡内での作業内容の違いなどに基づいて，遺跡類型を設定した（加藤，1996a）．加藤はこの中に幌加型細石刃核の遺跡も組み込んでいる．ここでは荒屋石器群に限定し，加藤と同様の視点で新たに類型を設定しなおす．出土点数，組成の規模，遺構等の有無を基準に以下の３類型を設定する．I 類：石器出土点数が 10 点未満の断片的な資料で構成される遺跡．限定的な作業内容または相対的に短い滞在時間の行為痕跡と解釈する．II 類：10 点以上 1000 点未満の遺跡で，多くの器種や剥片類から構成され，遺構・礫群を持たない遺跡．I 類と III 類の中間的な性格を想定する．III 類：1000 点を超える石器が出土する大規模な遺跡で，多くの器種や剥片類から構成され，かつ構築的な遺構または礫群をともなう遺跡．I 類や II 類より相対的に長時間あるいは反復的な滞在で，より多様な活動の行為痕跡と解釈する．

検討対象は，面的な発掘調査が実施され，かつ人工遺物の特徴から分離できる程度の範囲内で，重ね書きの可能性が低いと判断した遺跡に限定する．条件に適した 44 遺跡のうち，I 類は 28 遺跡，II 類は 13 遺跡 ,III 類は３遺跡となった．図 11 と表３は類型別の遺跡分布図である．I 類と II 類は各地域に分布する．C 地域（関東平野）では II 類がほぼ等距離に分布し，その間を I 類が充填している．

III 類は３例のみで，うち２例は A 地域にある [10]．図 11 で３の角二山遺跡は，“硬質頁岩”の産出地に近く，両面石器と削片が総じて大きい（図 6 上段の 5 および下段の 6）．発掘資料で 5763 点，採集資料をあわせると 6000 点以上の石器が回収されているという．削片が多いことも特徴である．円礫が径約 4 - 5 mにまわる礫群が検出されている（加藤・酒井ほか，1982）．図 11 で 9 の荒屋遺跡は A 地域ではあるが，山形県や福島県の南部山間地からは約 100km 以上離れており，出土石器に用いられる“硬質頁岩”は，遺跡付近の河床礫には含まれない．第 1 次調査で 2378 点，第 2・3 次調査の 92,435 点を合わせた総計約

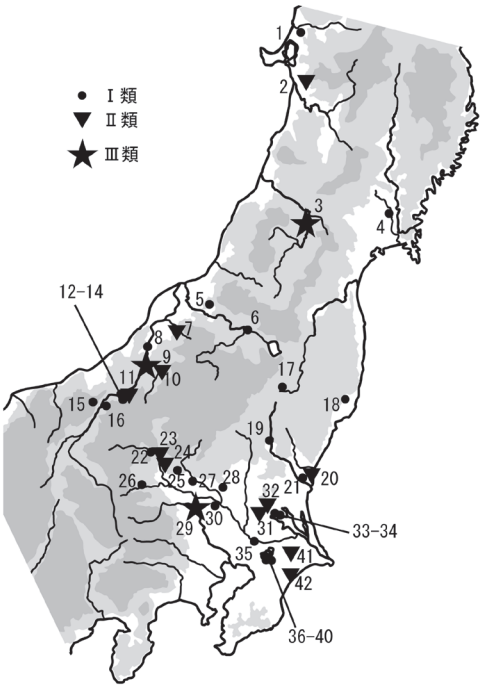


図 11　類型別の遺跡分布　［番号は表３に対応］

95,000 点の出土資料（東北大学大学院文学研究科考古学研究室・川口町教育委員会 ,2003 ほか），その他にも地元研究者によって収集された多数の表採資料が存在する．ところが角二山遺跡とは異なり，両面石器＝細石刃核や削片が大きくはない（図６上段の 14 および下段の 10，長沼・佐野，2003 など）．また礫面を残す剥片が剥片全体の 3.6％にすぎないとも報告されている（東北大学大学院文学研究科考古学研究室・川口町教育委員会 ,2003：73）．A 地域内ではあるが，“ 硬質頁岩 ” の獲得タイミングからある程度離れているようである．長径 3.8 m深さ 0.2 mの竪穴住居状遺構と，19 基の様々な大きさの土壙が複雑な切り合い関係をもって検出され，反復的な土地利用を示している．C 地域で唯一のⅢ類である白草遺跡は，出土点数こそ 4416 点と多いが，フルイ回収の微細剥片や細石刃，彫器削片が大半である．点数で 99％以上を占める “ 硬質頁岩 ” の総重量は 1.2kg にすぎない．それでも関東平野の中では突出している．白草遺跡では径 2.3 m× 1.5 m，深さ約 0.5 mの皿状の土壙が 1 基検出され，その中からも石器群が濃密に出土した（埼玉県埋蔵文化財事業団，1993）．荒屋遺跡で２基検出された「大型土壙」とおおむね一致する形状と大きさであることから，荒屋遺跡では複数が切りあっていた構築物が，白草遺跡では単独の姿で現れているのかもしれない．

（５）地域間の遺跡間連鎖

これまでの分析結果をまとめる．日本海側山間部と仮定した “ 硬質頁岩 ” の獲得地から離れるにつれて遺跡の数は減少し，両面石器は小さくなり，リダクション段階の後半の石器が遺跡に残され，また小規模な遺跡が多くなる．上記の傾向からは，A 地域でリダクションの前半が進んだその個体が，B 地域や C 地域に持ち出され，引き続き後半のリダクションが継続されたと解釈できる．これは機会限定的な石材獲得を示唆する．B 地域の遺跡の中には，A 地域からの行程の往路で “ 硬質頁岩 ” の獲得後あまり時間をへていない場合と，逆に C 地域からの復路で手持ち石材が少なくなっている場合との，両者が含まれると考えられる．表２によれば，おそらく頭無遺跡は前者，後野 B 遺跡は後者であろう．標高の高い山地が途切れるまたは薄くなる所を選んで移動したと見るなら，その行路には利根川をさかのぼる群馬ルートと，那珂川をさかのぼる福島ルートを想定できる．頭無遺跡は群馬ルートの往路，後野 B 遺跡は福島ルートでの復路に残された行為痕跡であると解釈しておく．

遺跡類型では，III 類の大規模遺跡は注 10 でふれた潜在的候補の遺跡を含めても，A 地域に多く B 地域には 1 箇所のみ，C 地域には今のところ存在しない．ここに集団の移動・居住形態の地域間での違いを読み取りたい．A 地域と B 地域の巡行中には，拠点的な地所の長期滞在や反復的利用と，短期滞在の小規模キャンプとを組み合わせた移動・居住形態をとった．一方で C 地域での活動中は，頻繁に占拠地を移動して拠点をもたず，一回性の小規模キャンプを主体とする生活を営んだと解釈しておく．A B 両地域の拠点滞在中は石材節約の必要は低く，逆に C 地域の巡行中には効率的な石材消費が追求されたと考えると，小規模キャンプ主体の頻繁な移動生活とした，先の解釈と整合する．後野 B 遺跡の削片の細石刃核への転用（図９の 4），削片の彫器への転用（図９の 2），柏原遺跡の細石刃核から掻器への転用（図 10 の 7）など，いずれも石材の節約として説明できる．この節約性は，機会限定的な “ 硬質頁岩 ” の獲得との解釈に親和的である．

滞在地により居住形態を変えたとの解釈を仮に固定すると，その理由として狩猟・漁労対象など，食糧資源配置の季節的変異を想定できる（加藤，1996a・1997）．しかし季節性の指標となる有機質遺物を伴わない本州島では，議論をこれ以上詰めることはできな

表 3　類型別の遺跡一覧［図番号は図 11 に対応］

遺跡名	図番号	遺跡類型	石材地域	組成									遺構
				細石刃核	細石刃	削器	彫器	掻器	削片	礫器	その他	総計（剥片類含）	
釜掘川東	12	Ⅰ類	A				1					1	
小坂平	13	Ⅰ類	A	1								1	
大久保南	15	Ⅰ類	A	1								1	
落合	26	Ⅰ類	B				1					1	
稲荷山Ⅴ	25	Ⅰ類	B	1								1	
強戸口峯山	27	Ⅰ類	B				1					1	
中郷	30	Ⅰ類	C						1			1	
那須官衙関連	19	Ⅰ類	B				1					1	
向野No.1	21	Ⅰ類	B					1				1	
原田北	33	Ⅰ類	C				1					1	
寺畑	34	Ⅰ類	C				1					1	
聖人塚	35	Ⅰ類	C				1					1	
一里段A	17	Ⅰ類	B		1							1	
押手	22	Ⅰ類	B	1								1	
鍛冶山	6	Ⅰ類	A				2					2	
屋敷前	18	Ⅰ類	B		2							2	
高岡遺跡群大福寺	38	Ⅰ類	C	1					1			2	
瓜割	8	Ⅰ類	A	1					1			2	
赤羽根	28	Ⅰ類	B	1	1			1				3	
行塚B	5	Ⅰ類	A		2		1					3	
屋敷田	14	Ⅰ類	A		3		1					4	
杉久保C	15	Ⅰ類	A				3	1				4	
千苅	16	Ⅰ類	A	4								4	
間野台貝塚	37	Ⅰ類	C		2	1	1					4	
木戸先	3	Ⅰ類	C	2	1		2					5	
和良比	40	Ⅰ類	C	3			3					6	
名生館	4	Ⅰ類	B		1	1	1	1				6	
鴨子台	1	Ⅰ類	A				1	2				8	
高岡遺跡群大山	39	Ⅱ類	C	1	3	1	1	2				11	
東岡中原	32	Ⅱ類	C	1		2	7	3	1			41	
空港No.61	41	Ⅱ類	C	6	14	7	10	9	3			62	
中土	7	Ⅱ類	A	4	22	6		9		1	1	79	
木戸場Ａ地点	36	Ⅱ類	C	2	3	11	9	7				102	
正面中島	11	Ⅱ類	A	1	19	15	11	11	2	1		156	
大網山田台No.8	42	Ⅱ類	C	2	34	9	9	7		1		175	
箱田遺跡群上原	23	Ⅱ類	B		51	1	2	2	1			183	
柏原	31	Ⅱ類	C	2	104	1	2				1	243	
下堤D	2	Ⅱ類	A	2	11	1	2					約250	
月岡	10	Ⅱ類	B	6	93	10	14	5	9			378	
頭無	24	Ⅱ類	B	1	121	10	9	1	1			425	
後野B	20	Ⅱ類	B	4	167	4	7			1		748	
白草	29	Ⅲ類	B	1	478	2	21	2	6	1		4416	土壙
角二山	3	Ⅲ類	A	9	1212	6	29	32	31	12	○	5763	礫群
荒屋(1次・２次・３次	9	Ⅲ類	A	71	6272	5	1051	30	27	8	○	94813	土壙群・竪穴住居状遺構

い．またこれらの解釈は将来，石器出土数が多く遺構を伴う遺跡がＣ地域でも多数発見されてくるならば，反証されることになる．

Ⅵ．本州島と北海道の比較

（１）石材の節約性を高めた表現型

以上の荒屋石器群の性質から，北海道の上幌内モイ石器群と札滑石器群を照射してみよう．札滑型細石刃核をもつ他にも，荒屋石器群と上幌内モイ石器群・札滑石器群には，以下に述べる３つの共通点を指摘できる．

第１は荒屋石器群のⅡ類遺跡と上幌内モイ石器群

の類似である．ともに石刃核や不定形剥片石核など塊状の石核を組成せず，もっぱら両面石器リダクションによる剥片石器の素材供給の痕跡だけが遺跡に現れている．荒屋型彫器に顕著な剥片石器の独特な画一性も，この事情と関連すると考えられる．これらの点では，上幌内モイ石器群と荒屋石器群のII類遺跡は，主要石材が黒曜石か“硬質頁岩”かの違いだけで実質的に同じといえる．これらは札滑型細石刃核をもつ石器群の技術構造が，石材の獲得タイミングから離れて，石材の節約性を高めた状況で発現した表現型と解釈できる．今後は北海道でもこの表現型の確認例が，石狩低地帯など黒曜石や“硬質頁岩”の産出地から離れた平原景観という，本州島の関東平野と共通する条件下を中心に増えてくると予測しておく．上幌内モイ遺跡とオルイカ２遺跡は，かつて関東平野で後野Ｂ遺跡や木戸場遺跡（千葉県文化財センター，1987）がそうであったように，先駆的事例であると考えている．ただし上幌内モイ石器群の中でも石川１遺跡は，両面石器のリダクション初期段階の準備をおこなっている点で，後述する石材獲得地の近くに残された遺跡に近い性質も認められる[11]．

（２）中継拠点的な表現型

第２に荒屋石器群のIII類遺跡の一部は，札滑石器群の一部と中継拠点的な遺跡として類似の性質をもつ．具体的には荒屋遺跡と帯広市暁遺跡第１地点とは，さまざまな点でよく似ている．

先述したように荒屋遺跡では９万点以上の石器が出土した．後の範囲確認調査によって，この石器集中は約 50㎡の範囲内におさまる可能性が指摘されている（川口町教育委員会，2002）．多くの土壙が切りあって検出されていることから，すべての石器が一回の滞在で残されたのではなく，反復的な土地利用の可能性が高い．よく知られているように彫器の数が極端に多い（２次・３次調査分で 626 点）．暁遺跡第１地点は，木村英明によって石材流通ネットワークの中継地的な遺跡と解釈されている（木村，1995）．約 2500m^2 の調査範囲に 16 ヶ所の石器集中（報告書ではスポット）が確認され，33,851 点の石器が出土した（十勝考古学研究所，1989）．荒屋石器群のII類や上幌内モイ石器群では，多数の石器集中部が形成されることはまれで，通常は１～３箇所程度の石器集中であることが多い．これにてらすと暁遺跡第１地点の石器集中の数は異例である．やはり荒屋遺跡と同様に，繰り返しの活動痕跡が同一平面に累積していると考えられる．ここでは細石刃の数が極端に多いことが特徴である（8332 点）．このように，①多量の石器の出土が同一地所への繰り返しの占拠を示唆すること，そこでは②特定の器種が極端に多いこと（荒屋の彫器，暁の細石刃），この２点で荒屋遺跡と暁遺跡第１地点は同型である．

さらに暁遺跡第１地点では峠下型細石刃核も多数出土しているが，特定産地に限定されない非白滝産の黒曜石で（北沢，1996），転礫素材もあるという（山科，2004）．これとは対照的に札滑型細石刃核は，白滝産の黒曜石に限られるという（木村，1995；北沢，1996；髙倉，2003；山科，2004）．札滑型だけについてみるならば，③石材獲得地から必ずしも近くはない位置で多量の石器が残ること，④削片の出土点数が少ないこと，⑤両面石器＝細石刃核がさほど大きくはないことも，暁遺跡第１地点と荒屋遺跡とはやはり共通する．大形原石の獲得可能な地区からある程度離れた，しかし極端に離れすぎない時点・地点に，このような場を設けたことが考えられる．おそらく大形原石の産出地に出向くだけでなく，このような場に回帰し，地表に散布している石器類を採取することでも，石材補給が可能であったと考えられる．

本州島の荒屋石器群でも，荒屋遺跡や角二山遺跡など日本海側の遺跡では，札滑型以外の細石刃核が出土することがある．ただし本州島では幌加型が多い[12]．加藤博文は，長距離移動には石材節約的な「削片系」を，短距離移動には「舟底形」（幌加型）との具合に，別立ての装備を同じ「技術体系」の中から出し分けると解釈した（加藤，1996a）．永塚俊司も，本州島の幌加型とされる資料を荒屋石器群の内部での変異と理解した（永塚，1997）．はたして本州島の幌加型の全てを，この論法で説明できるのかどうか当否はむずかしい．しかしながら加藤の発想を，石材を節約する条件下では両面石器による石材運用が主体となった結果として，細石刃核では札滑型と呼ばれる姿のみが個別遺跡に現れたと言い換えるならば，先述した剥片石器の画一性と同じ要因で説明できる．暁遺跡第１地点の資料についても山科　哲は，峠下型は遺跡に近い十勝産黒曜石を多く含むことから，「石材補給の機会が相対的に一定あるいは容易」と論じ，峠下型と札滑型は石材入手の条件によって選択されていた可能性を指摘した（山科，2004）．加藤が本州島の幌加型に与えた説明と同じ論法である．加藤と山科の解釈が仮に妥当なら，北海道の峠下型と本州島の幌加型は，①札滑型と組になる点，②特定石材（北海道の白滝産黒曜石と本州島の“硬質頁岩”）にこだわる札滑型と比べて，相

対的に遺跡付近での常時的な石材補給の可能性があること，この２点で同型といえよう．これら札滑型以外の細石刃核は，機会限定的な特定タイミングで獲得した主要石材以外に，移動先で必要に応じて石材を補充した際に，発現した姿であると解釈したい．

ここで指摘した中継拠点的な遺跡の共通性は，北海道と本州島それぞれ１遺跡の事例から導いたにすぎない．将来，北海道と本州島で暁遺跡第１地点や荒屋遺跡に匹敵する規模と性格の遺跡が複数調査・報告された時点で，具体的な検討が可能になろう．

（３）石材獲得地付近で発現する表現型

第３として，大形原石を獲得できる条件下の遺跡も，荒屋石器群Ⅲ類の一部と札滑石器群で共通した性質をもつ．荒屋石器群では，“硬質頁岩”の転礫を獲得できる河川に近い角二山遺跡である（同じ条件の大平山元Ⅱ遺跡を加えてもよい）．札滑石器群では黒曜石包蔵地である白滝村赤石山に所在する幌加沢遺跡遠間地点と，そこから直線距離で数 km の上白滝２遺跡 Sb3-6 ～ 10 石器群である．幌加沢遺跡遠間地点は 2003 年の集計で 392,266 点の石器が（木村，2003），上白滝２遺跡 Sb-3 ～ 6・10 石器群では 5888 点の石器が出土している（北海道文化財センター，2001）．いずれも原石から両面石器リダクションの初期段階を実施しており，遺跡に残された両面石器と削片が，石材産出地から離れた遺跡よりも大きい．こういった大形原石の獲得できる特定の占拠地で準備した両面石器を携えて，長距離移動に繰り出したと解釈できる．

また幌加沢遺跡遠間地点と上白滝２遺跡 Sb-3 ～ 6・10 石器群では，石刃や石刃核も多量に出土し，石刃核リダクションでも石材を運用していたかに見える．北海道では，細石刃核を組成する遺跡でも石刃が多いことが通例である．忍路子型細石刃核を組成する石器群の遺跡では，小形の石刃が多数出土し，石刃核もしばしば伴う．彫器や掻器の素材の多くは石刃である（高倉，2000；赤井，2005a，2005 b など）．広郷型細石刃核は，規格的な大形石刃を細石刃核の素材とすることが，細石刃剥離の技術的前提である（鶴丸，1979）．峠下型細石刃核の石器群には諸相があり，その一部は札滑石器群の一部である可能性もあるが（山田，2006），黒曜石産出地の近傍で石刃を量産して，これらを細石刃核の素材にあてる接合資料も確認されている（鈴木，2003）．蘭越型細石刃核は，楔形石核がリダクションの初期で大形のうちは石刃を剥離し，小形化すると細石刃の剥離に連続的に移行する．彫器と掻器には石刃素材が多い（北海道埋蔵文化財センター，1999）．こうした他の石器群の中にあって，石刃が目立たない上幌内モイ石器群はむしろ異質である．

幌加沢遺跡遠間地点や上白滝２遺跡 Sb-3 ～ 6・10 石器群で，札滑型細石刃核や削片とともに大形石刃と石刃核が大量に出土し，接合例も多いことは，石材産出地に近い大規模遺跡であるため，時期の異なる行為痕跡が混在している可能性もあろう．しかしながら，札滑石器群や上幌内モイ石器群が，石刃核リダクションを潜在的には保有しており，大形原石の獲得地付近に限って発現したとの解釈も成立し得る．

荒屋石器群でも関東平野に点在するⅡ類遺跡では，上幌内モイ石器群と同様に石刃や石刃素材の剥片石器を組成しない．だが“硬質頁岩”の産出地に近い日本海側では，月岡遺跡（中村・小林，1984），正面中島遺跡（津南町教育委員会，2002）など，小規模な遺跡でも一定数量の石刃や，石刃素材の彫器，削器がある．“硬質頁岩”原石を獲得できる河川に近い角二山遺跡や大平山元Ⅱ遺跡でも，石刃と石刃素材の削器に加えて，石刃核が出土している．石材産出地の近くでは石刃を組成し，離れると石刃が出土しない現象は札滑石器群と上幌内モイ石器群の関係と共通する．なぜそうなのか説明は現時点ではむずかしいが，北海道も本州島も同じであることから，時期の異なる石器群との重ね書き・混在という説明よりも，石材運用の特性として理解するべきと考える．両面石器のリダクションが進行していない状態で，大形の両面石器から縦長剥片や石刃を剥離するとの説明もあるが（山田・白石，1990a；永塚，1997），幌加沢遺跡遠間地点などには,明らかに両面石器ではない石刃核がある．石刃・石刃核の石材運用と両面石器の石材運用では，はたしてどちらが長距離移動や機会限定的な石材獲得に「より」適するのか，あるいは，かかる問いを立てることに意味があるのか，重ね書き分離の困難も含めて課題は多い．なお本州島の荒屋石器群では，幌加沢遺跡遠間地点に正しく匹敵する膨大な遺物量の遺跡は，今のところ未確認である．将来，日本海側で発見・調査される可能性に期待したい．

以上で指摘した３つの共通点は，類例の増加をまって検証すべき部分も残るとはいえ，いずれも機会限定的な石材獲得と石材の節約を示唆することから，長距離移動生活と関連する性質であると解釈する．北海道の上幌内モイ石器群や札滑石器群の個別遺跡も，本州島の荒屋石器群と同じく，黒曜石や“硬質頁岩”産出地帯への回帰を前提として長距離を周回する移動・居

住形態によって，形成されたものと説明しておく．ただし北海道では“硬質頁岩”にくわえて黒曜石の大形原石が用いられたが，本州島では“硬質頁岩”のみに特化した点が異なっている．上幌内モイ遺跡も，こういった移動生活の一コマであった行為痕跡として理解したい．

（4）つなぎ止められた石材運用

島田和高は，南関東「砂川期」の「石核消費」は平野部河川で各種石材の適宜・常時獲得であったのに対し，尖頭器石器群の「両面体消費」は，特定石材の原産地（出現期には中部高地の黒曜石，やがて平野部山麓各地の各石材に推移）に，拠点的につなぎ止められていると論じた（島田，1999）．両面石器が，特定の石材獲得タイミングにつなぎ止められる場合もあるとの指摘は，札滑型細石刃核に関連する石器群を理解する上でも重要である．上幌内モイ石器群，札滑石器群，荒屋石器群も，黒曜石や“硬質頁岩”の大形原石を獲得できる特定の産出地近傍で，大形の両面石器を量産してこれを搬出・携帯する方策が主体であることから，やはり特定石材の獲得地につなぎ止められているといえる．

この意味でつなぎ止められていないように見える札滑型細石刃核の石器群として，本州島では月見野遺跡群上野遺跡第1地点第II文化層（大和市教育委員会，1986）や長堀北遺跡第II文化層（大和市教育委員会，1991），中ッ原第5遺跡B地点と同第1遺跡G地点（八ヶ岳旧石器研究グループ，1991，1996；堤，1996），柳又遺跡A地点第V文化層（國學院大學考古学研究室，1997）などがある．これらは“硬質頁岩”以外の石材を用いて，荒屋型彫器を組成しないこともある．「遺跡周辺の狭い範囲内を一定期間占拠する行動形態」（佐野，2002），「長距離移動はするもののより長期間遺跡周辺に滞在する」との解釈がしめされている（佐野，2003）．後述する本州島の幌加型細石刃核をもつ石器群にも，同じような性質を看取できる．

北海道では忍路子型細石刃核を組成する石器群が，つなぎ止められていないかに見える．全道的に広く分布し調査報告例も多いが，本州島には分布しない[13]．石材が黒曜石を主，“硬質頁岩”など非黒曜石を従とする点は，札滑石器群や上幌内モイ石器群と一見同じだが，黒曜石は一遺跡の中でも複数産地のものから構成されている可能性が高い．“硬質頁岩”などの非黒曜石は，彫器以外にもみられる．居辺17遺跡では，珪藻岩と記載された石材で両面石器を用意し，細石刃核の素材としている（上士幌町教育委員会，2001）．黒曜石も含めて石刃核の素材が転礫を含むことは，河川での石材採取を示唆する．先述したように石刃核リダクションの石材運用が主体で，小形石刃としての携帯と，石刃核の状態で携帯し必要に応じて小形石刃を剥離する方策との併用である．これらは移動の先々での石材の適宜補給をうかがわせる．くわしい議論は機会を改めるが，札滑石器群や上幌内モイ石器群とは異なる移動・居住形態と石材運用を想定できる．

札滑型細石刃核に関連する石器群が，特定石材の獲得につなぎ止められたことは，長距離移動とした解釈と矛盾するように見えるかもしれない．しかし，つなぎ止められた確実な石材補給を前提に，計画的な長距離移動が可能とも説明できる．極端に遠くまで遠征した際は移動先でも石材を補充したことは，石材の一部が瑪瑙に置換した岡山県恩原2遺跡の事例に明らかである（岡山大学文学部考古学研究室，1996）．先述したように，札滑石器群が峠下型を，荒屋石器群が幌加型を，つなぎ止められている石材以外を用いる際に，ある種のオプションとして装備していた可能性もある．この，つなぎ止められた石材利用と適宜補充との併用が，札滑型細石刃核をもつ石器群の特徴といえるかもしれない．個別の遺跡においては，その遺跡となった活動の違いによってそれらの一部が見え隠れする結果，多様な札滑石器群と，画一的な荒屋石器群，荒屋石器群によく似た上幌内モイ石器群などの姿が，それぞれ発現するのであろう．

（5）札滑型以外の細石刃核を組成する石器群

札滑型の他に，北海道と本州島に共通して分布する細石刃核型式は，白滝型と幌加型である．白滝型で確実な石器群組成をもち公表されている遺跡は，新潟県樽口遺跡A-MS文化層（朝日村教育委員会，1996），岐阜県宮ノ前遺跡（宮川村教育委員会，1998）がある．北海道では重ね書きや混在の分離が困難，組成が不明，全容が未報告といった遺跡が多く，石材運用やリダクションの諸変異は未解明であるが，剥片石器の素材が石刃を主体とすること，両面石器は小形で石核を兼ねない（白石，1993b；加藤，1997），木葉形の両面調整尖頭器を伴う（山田，2006）などの指摘がある．細石刃核として幌加型だけを組成する石器群は，本州島では樽口遺跡A-MH文化層（朝日村教育委員会，1996），天神尾根遺跡（佐久市教育委員会，2006），枡形遺跡（相沢・関矢，1988）など中部地方と北関東を中心に，在地石材と石刃核リダクション主体という共通した表現型で一定の数の遺跡が分布する．北海道では，これらと同じように幌加型が単独で発現する

確実な例は長い間知られていなかったが，近年では北海道の編年案の中でも独立したグループとして認められている（寺崎，2006；山田，2006）．石刃核リダクションを主体とし荒屋型ではない彫器など，中部地方・北関東の例と似ているようであるが，具体的な論及は機会を改めたい．

北海道と本州島で，類似ないし共通したあり方を多くの事例で確認できるのは，現時点では札滑型細石刃核に関連する石器群だけといえよう．次には白滝型と幌加型である．かつて栗島義明は，本州島の湧別技法を型式学と組成論で細分し，数段階の時間差として「北からの波及」を論じた（栗島，1993）．提示された細分編年案は，型式学以外の系からの検証が可能な時間幅を逸脱して細かすぎ，また北海道から本州島への一方的波及との前提にも問題はある．しかしながら，石器群が広域に拡散する機会は何度もあったとの視点と，具体的な資料にそれを探る姿勢は良質であり，継承するべきと考える．栗島の前提や結論の当否は別にしても，石器群ごとに広域に拡散した条件や，局地的にとどまった条件があったはずである．小稿で検討した札滑型細石刃核の石器群は，長距離移動を背景とした技術構造をもって広域に広がったが，忍路子型細石刃核の石器群は，これとはまた異なる技術構造で北海道内のみに展開したのではないだろうか．白滝型と幌加型は不明な部分が多いが，広がりの範囲と程度という点に限ると，広域の札滑型と北海道内にとどまる忍路子・広郷型との，中間的な性格がうかがえる．詳論は今後の課題である．

VII. おわりに

更新世終末期の両面石器群の事例として札滑型細石刃核に関連する石器群を検討し，機会限定的な石材獲得と長距離移動という行動形態を示唆する点で，北海道と本州島の遺跡は共通することを示した．細石刃核型式名で代表される北海道の石器群の前後関係には，近年でも試案がある（山原，1998；寺崎，1999，2006；山田，2006 など）．これらでは短い時間幅の中で異なる石器群が同時異相的に展開した可能性も考えられており，確実なところは今なお不明といってよい．石器群が広域拡散あるいは局地展開した背景には，先述した石材運用とともに，気候や植生，狩猟対象など自然環境の変化も考えられる．いやむしろこちらのほうがより規定的であり，石器の技術はそれらへの適応手段にすぎないはずである．しかし，ここで問題となる時間幅での環境イベントとの対比には，石器群の前後関係の確定がまず必要である．また本州島側の事情からの説明もある．本州島は，北海道より早いうちに定住化傾向がすすみ，その時点ではもはや北海道的な石器群は南下しなかったとの説である（佐藤，2003：277-278）．

これらの議論を先に進める上で課題は多い．北海道の峠下型や本州島の幌加型が，すべて札滑型細石刃核と共通する技術構造の別側面なのか，それとも一部は別物なのか[14]，降下テフラと ^{14}C 年代から，最古の細石刃石器群とされる蘭越型が継続した時間幅，白滝型を組成する石器群の年代と技術構造，有茎尖頭器や一部の形状の彫器を共有する，忍路子型と広郷型との関係および年代などである．これらに説明を与えた上ではじめて，栗島が試みた数度にわたる拡散の編年整理，その環境イベントとの対比，そしてそれらを踏まえて，札滑型以外について北海道と本州島との具体的な比較研究が可能になろう．

謝辞

小稿の V は，1995 年 12 月に筑波大学に提出した卒業論文に加除筆したものである．卒業論文の作成について，当時筑波大学在任中の西田正規，西野　元，前田　潮，常木　晃の諸先生方から懇切なご指導を賜った．すでに 10 年以上も経過してしまったが，記して御礼申し上げます．IV と VI で北海道関連の文献収集や資料・遺跡見学，黒曜石原産地見学では，赤井文人，阿部明義，石川　朗，出穂雅実，乾　哲也，今井真二，太田敏量，嘉藤　均，加藤博文，北澤　実，木村英明，木村拓也，熊林佑允，佐藤宏之，鈴木建治，鈴木宏行，髙倉　純，友田哲弘，鶴丸俊明，徳元通子，直江康雄，長崎潤一，奈良智法，松村愉文，宮本雅通，矢吹俊男，山田和史，山田　哲，山原敏郎，Y. V. クズミンの各氏，旭川市教育委員会，厚真町教育委員会，帯広市教育委員会，北見市教育委員会，釧路市埋蔵文化財センター，倶知安町教育委員会，札幌大学，札幌学院大学，札幌国際大学，下川町教育委員会，白滝村教育委員会，北海道埋蔵文化財センターの諸機関に，多大な便宜とご教示を賜った．ただし誤りや不十分な点はすべて筆者の責任である．

注

1）筆者はこれまで，現行の行政区分（都道府県や郡市町村）を先史時代に実体視する前提への批判（長沼，2005）の意図で，「北海道島」の語を用いてきた．

しかし北海道やサハリンと現在呼ばれる島々は，海面低下時には大陸まで地続きの「古サハリン - 北海道半島」であり（佐藤, 2003;木村, 2006 など），「島」の語は不適切であると考えを改めた．今後は単に「北海道」と表記するが，「古サハリン - 北海道半島の南部」との意味である．古サハリン－北海道半島は「北アジアの寒冷な周氷河地帯と東アジアの温暖な森林地帯の境界に位置」し，「北海道は独特なオアシスであり，古サハリン－北海道半島の好熱性生物にとっての避難地だった」と評価されている（ワシリエフスキー，2006：19）．なお本州より南については「本州島」の語を用いるが，海面低下時の地形を想定する原則から，現在の四国と九州ならびに島嶼部の多くを含むことになる．

2）忍路子型と広郷型の本州島における出土例はきわめて断片的であり，現時点では未確認とみなしてさしつかえないと考える．忍路子型に関連すると指摘のある山形県稲沢山遺跡や越中山遺跡 D 地点は（上野・加藤，1973），実測図から判断すると，上野らもことわっているように，北海道の典型的な忍路子型細石刃核や，それをもつ石器群とは異なるように見える．広郷型とされた滝遺跡は（加藤・酒井ほか，1982）やはり実測図からの判断ながら，細石刃核自体は広郷型でよさそうだが，採集資料であるために石器群組成の全体が北海道の典型例と一致するのか不明である．いずれにしても札滑型にくらべると，安定した組成をもつ石器群が多数確認されているわけではないことは，確かである．

3）北海道の「細石刃石器群」の概念は本州島とは異なる（髙倉，2003）．前半期細石刃石器群（蘭越型，札滑型，峠下型）（寺崎，1999；山田，2006）は，本州島とほぼ同じ概念の「細石刃石器群」に近い．しかし後半期細石刃石器群（忍路子型や広郷型など）は，本州島の「いわゆる縄文草創期」と同様に，有茎尖頭器や大形尖頭器，石斧を伴う．このため本州島と同じ意味で，「尖頭器石器群」や「縄文時代」から区別される単位ではない（佐藤，2003）．現在でも北海道と本州以南では，気温や降水量，植生や動物相など生態学的環境が異なる．先史時代とくに寒冷期には，人々の自然環境への適応戦略が，北海道と本州島とで一致したとは考えにくい．おそらく全ての時代を通じて，温暖期には本州的な人類文化が北海道に北上し（現在がまさにそうであろう），寒冷期には北海道的な人類文化が本州島に南下したと考えられる．

4）図 1 で中段の細石刃核の両側面にみられる磨耗も運搬によって生じたと解釈するなら，この細石刃核は，本遺跡内では器体の厚さを減ずる側面調整が実施されなかったと考えられる．しかし細石刃の剥離が進行した状態の側面に磨耗が見られることは，細石刃剥離時の固定具との接触で生じた磨耗の可能性もある．

5）渡島半島以外でも，非黒曜石の珪質な石材が，黒曜石との様々な量的割合の変異を示しながら出土し，産地の探索が試みられている（髙倉，2005 b など）．

6）“硬質頁岩”の両面石器が不在の理由として，微細な剥片は出土していることから，この場で両面石器のリダクションがわずかに実施された後に，芯の両面石器が遺跡外に搬出されたと解釈できる．あるいは，この場に来訪する前に生じた調整剥片だけを搬入したのかもしれない．いずれにせよ石材を両面石器の形で管理・運用する機制が，“硬質頁岩”にも作用していたと推測できる．また上白滝 2 遺跡は，黒曜石産地に至近のいわゆる「黒曜石原産地遺跡」であるが，この中で Sb-14 とされた石器集中だけが“硬質頁岩”のみで構成される．ここでは両面石器から削片を剥離する過程，細石刃を剥離する過程の接合資料が確認されている．出土点数も少なく，報告者は「本石器群は遺跡内で唯一消費地遺跡的な石材消費が行われている」と記載している（北海道埋蔵文化財センター，2001：285-286）．この事例も，両面石器の形で石材を管理して，削片や細石刃核，細石刃を生じるリダクションが“硬質頁岩”でも実施されていた可能性を暗示すると考える．

7）荒屋石器群の内部を人工遺物の特徴によって年代的に細分する根拠は薄いと判断し，荒屋石器群すべてを「幅広い時間幅をもつ同時」とみなす前提で議論を行う．

8）単に「削片」と記した場合は両面石器を割って生じたものをさす．第 1 削片（ファースト・スポール），第 2 削片（セカンド・スポール，スキー状スポール）を含む．彫器の樋状剥離で生じたものは含まない．論及する場合には，「彫器削片」と別表記する．

9）山形県の南部山間地，“硬質頁岩”の産出地に近い東山遺跡では，長さ約 32cm の両面石器が採集されているという（加藤・酒井ほか，1982）．後述する幌加沢遺跡遠間地点や，白滝遺跡群など北海道の黒曜石露頭の近くで出土する両面石器に相当する大きさである．このような大形の両面石器が多数出土

する遺跡が，本州島の“硬質頁岩”産地付近に存在する可能性がある．荒屋石器群の要素を含む大平山元Ⅱ遺跡（蟹田町教育委員会，1992）では，長径約 15cm 前後の両面石器が多数出土している．この遺跡では，2 km 上流で剥片石器の製作に好適な“硬質頁岩”が獲得できるという（大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団編，1999：7）．

10）条件にあわず検討対象から外した中に，Ⅲ類の候補となる遺跡が他に二つある．いずれもＡ地域（日本海側）である．新潟県大刈野遺跡（湯沢町教育委員会，1988）は，約 2000 点の石器群と複数の礫群が検出された．大形尖頭器石器群との分離が困難な出土状況で，荒屋石器群と礫群の関係も評価が難しいことから，検討対象から外した．実見によると“硬質頁岩”製で荒屋石器群とほぼ確定できる資料は約 30 点前後で，その他の在地石材を仮に全て分離するならば，Ⅱ類遺跡とみなすべきかもしれない．もう一つは福島県笹山原遺跡群 No.27 遺跡（高原ほか，2002）である．表採資料のみであるため対象外としたが，約 1200 点以上の石器が採集されており，荒屋型彫器だけでも約 100 点におよぶという．試掘調査の結果，遺跡は破壊・消滅していたことが確認されたという．遺構の有無はもはや検討不可能だが，彫器が多い点で，荒屋遺跡に類似した内容や規模であった可能性がある．

11）石川 1 遺跡は，白滝型細石刃核の石器群のグループとして理解する立場もある．この場合，上幌内モイ石器群として扱うことは不適切かもしれない．両面調整尖頭器を伴う点や，細石刃核母形となる両面石器がはじめから薄手で小形であること，薄手の削片を繰り返し剥ぎ取るなど，たしかに札滑型の他の遺跡とは異なり，むしろ本州島の樽口遺跡を含めた白滝型の遺跡に近い技術的特徴もある（山田，2006）．

12）幌加型以外に「野岳休場型」などの細石刃核が伴う場合もあるが，重ね書きか否か検討は難しい．群馬県馬見岡遺跡では，“硬質頁岩”製の荒屋石器群と，黒曜石製「野岳休場型」細石刃核の石器群とが，同一の石器集中を成して検出されている（小菅，2004）．

13）忍路子型細石刃核に関連する石器群について，具体的な検討は機会を改めて取り組みたい．筆者が実見した資料は，北斗遺跡，大空遺跡，稲田 1 遺跡，豊岡 7 遺跡，北上台地遺跡，西町 1 遺跡，桜岡 3 遺跡，メボシ川 2 遺跡，オサツ 16 遺跡である．本文中で文献を引用した箇所以外の記述は，これらの観察による．

14）札滑型，峠下型，幌加型そして「美利河型」は，幌加沢遺跡遠間地点や新道 4 遺跡をはじめ北海道の資料からみる限り，一体の技術構造からの表れ方の違いという説明（木村，1995：加藤，1996a）に説得力があり，筆者もこの立場を継承する．しかしこの説明を前提としたうえでの疑問もある．なぜ本州島では峠下型と「美利河型」が出土しないのか．また北関東を中心に分布する細石刃核では幌加型だけを組成する石器群が，なぜ荒屋石器群と異なる在地石材と石刃核リダクション主体の石材運用で共通しているのか．これらについても，行動論的な視点から説明する必要があると考える．

引用文献

相沢忠洋・関矢　晃（1988）赤城山麓の旧石器．280p，講談社．

赤井文人（2005a）千歳市丸子山遺跡恵庭 a テフラ上位石器群の再検討．論集忍路子 I，103-123，忍路子研究会．

赤井文人（2005b）石狩低地帯南部における細石刃石器群の研究－千歳市メボシ川 2 遺跡出土石器群の再検討－．北海道旧石器文化研究，10，59-78．

赤井文人（2006）遺物．厚真町教育委員会「上幌内モイ遺跡 (1)」：140-141．

阿子島　香（1997）続・ドゥフォール岩陰の彼方に－岩陰遺跡文化層の構造論的理解－．歴史，89，83-112．

秋田市教育委員会（1993）狸崎 B 遺跡，122p．

安斎正人（1990）無文字社会の考古学．286p，六興出版．

朝日村教育委員会（1996）樽口遺跡，188p．

厚真町教育委員会（2006）上幌内モイ遺跡 (1)，182p ＋ PL51．

千葉県文化財センター（2000）新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ－東峰御幸畑西遺跡 (空港 No.61 遺跡) －第 1 分冊，371p ＋ PL24．

千葉県文化財センター（1987）佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡，209p．

萩谷千明（2003）北関東の細石刃文化．堤隆編「シンポジウム日本の細石刃文化Ⅰ－日本列島における細石刃文化－」：156-183，八ヶ岳旧石器研究グループ．

橋本勝雄（1988）千葉県佐倉市木戸場遺跡 A 地点

「第１・第２ユニット」から．研究連絡誌，21，12-18，(財) 千葉県文化財センター．
橋本勝雄（1989）東日本の細石器文化－東北・北陸・中部高地・東海地方の研究の動向－．考古学ジャーナル，306，12-21．
橋本　正（1977）直坂Ⅱ遺跡第５ユニットから．ドルメン，15，63-80．
北海道埋蔵文化財センター（2005）千歳市オルイカ２遺跡 (2)，492p ＋ PL96．
北海道埋蔵文化財センター（1988）石川１遺跡．320p ＋ PL80．
北海道埋蔵文化財センター（2001）白滝遺跡群Ⅱ．409p ＋ 325p ＋ PL312．
北海道埋蔵文化財センター（1999）千歳市柏台１遺跡．311p+PL52．
茨城県教育財団（2000）中原遺跡２，372p．
茨城県教育財団（1999）東原遺跡・前畑遺跡・柏原遺跡 , 88p ＋ PL32．
稲田孝司（1996）恩原に居住した旧石器時代の回帰遊動集団と植民集団．稲田孝司編「恩原２遺跡」：182-231，岡山大学文学部考古学研究室．
井上　巖（2006）上幌内モイ遺跡出土黒曜石の原産地分析．厚真町教育委員会「上幌内モイ遺跡 (1)」：162 -165．
出穂雅実（2006）ジオアーケオロジー．厚真町教育委員会「上幌内モイ遺跡 (1)」：118-128．
蟹田町教育委員会（1992）大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書，145p．
上士幌町教育委員会（2001）上士幌町･居辺 17 遺跡，135p．
勝田市教育委員会（1976）後野遺跡－関東ローム層中における石器と土器の文化－，130p．
加藤博文（1996a）モービル・トゥールとしての両面調整石器－縄文化にむかう技術組織の変動－．「考古学雑渉　西野元先生退官記念論文集」：26-44，西野元先生退官記念会．
加藤博文（1996b）細石刃石器群における生業活動の検討－シベリアからの視点－ (上)(下)．古代文化，48(3)，28-36，48(4)，19-28．
加藤博文（1997）技術体系とその多様性－細石刃石器群の事例にて－．筑波大学先史学･考古学研究, 8，1-29．
加藤　稔・酒井忠一ほか（1982）最上川・荒川流域の細石刃文化．「最上川総合学術報告」：768-819，山形県総合学術調査会．
加藤晋平（1970）先土器時代の歴史性と地域性．「郷土史研究講座Ⅰ考古学と地域性」:58-92，朝倉書店．
加藤晋平・大井晴男（1961）北海道常呂郡訓子府町緑丘Ｂ遺跡－第１次報告．民族学研究，26(1)，24-30．
加藤晋平・桑原　護（1969）中本遺跡－北海道先土器遺跡の発掘報告－．60p，永立出版．
加藤晋平･松本美枝子（1984）日本細石刃文化の源流．史艸，25，39-82．
川口町教育委員会（2002）荒屋遺跡－範囲確認調査報告書－．20 p ＋ PL ４．
剣持みどり（1979）角二山細石刃石器群の構造．山形考古，3(2)，9-25．
Kimura，H.（1992）Reexamination of the Yubetsu technique and study of the Horokazawa Toma Lithic Culture. Archaeological survey on the Toma locality of the Horokazawa site in Hokkaido, Japan, A preliminary analysis. 54p，Sapporo University，Sapporo.
木村英明（1995）黒曜石・ヒト・技術．北海道考古学会編「北海道考古学の諸問題 (北海道考古学，31)」：3-63，北海道考古学会．
木村英明（2002）北海道地域における黒曜石研究の展望－特に白滝黒曜石原産地を中心に－．黒曜石文化研究，創刊号，69-82．
木村英明（2003）白滝幌加沢遺跡遠間地点と黒曜石原産地［第九次調査概報］．札幌大学埋蔵文化財展示室，29p．
木村英明（2006）総論　特集旧石器時代の日本列島とサハリン・沿海州．考古学ジャーナル，540，3-6．
絹川一徳（1996）Ｍ文化層の石器組成と石器装備の維持・補給について．稲田孝司編「恩原２遺跡」：145-154，岡山大学文学部考古学研究室．
北川浩之（2003）荒屋遺跡第２・３次発掘調査で採集されたチャコール試料の加速器質量分析法による炭素 14 年代測定結果．東北大学大学院文学研究科考古学研究室･川口町教育委員会「荒屋遺跡－第２・３次発掘調査報告書－」：55-56．
北沢　実（1996）帯広市暁遺跡出土遺物の原材産地について．北海道旧石器文化研究，1，28-30．
小林達雄（1967）長野県西築摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型．信濃，19(4)，25-32．
小林達雄（1984）タイポロジー．麻生優ほか編「日本の旧石器文化〈1〉総論編」：48-63，雄山閣．

國學院大學文学部考古学研究室（1997）柳又遺跡Ａ地点－第７次発掘調査報告書，498p.
小菅将夫(2004)馬見岡遺跡第12次調査(学術分).「第10回石器文化研究交流会発表要旨」：23-26，石器文化研究会.
栗島義明（1993）湧別技法の波及－削片系と在地系の細石刃核について－．土曜考古，17，1-37.
桑原　護（1975）札滑遺跡．麻生優ほか編「日本の旧石器文化２遺跡と遺物〈上〉」：57-67，雄山閣.
桑原　護（1977）札滑遺跡－Ｋ地点の石器群－．22p.
松本　茂（2003）石器のかたちはどのように決まるか－石器製作行為をめぐる人間の認知－．松本直子ほか編「認知考古学とは何か」：54-70，青木書店.
宮川村教育委員会（1998）宮ノ前遺跡発掘調査報告書．422p＋PL14.
Morlan，R. E.（1967） The Preceramic Period of Hokkaido：An Outline.　Arctic Anthropology，IV(1)，164-220.
長沼正樹（2002）両面調整石器群研究序説－更新世終末期石器群理解の枠組み構築にむけて－．考古学研究，49(3)，65-84.
長沼正樹（2003a）更新世終末から完新世初頭における極東北部の両面調整石器群．古代文化，55(10)，25-33.
長沼正樹（2003b）両面調整石器の問題－予備的な一考察－．堤隆編「シンポジウム日本の細石刃文化 II －細石刃文化研究の諸問題－」：102-121，八ヶ岳旧石器研究グループ.
長沼正樹（2004）両面調整尖頭器の変形事例．考古学ジャーナル，512，8-11.
長沼正樹（2005）日本列島における更新世終末期の考古学研究－縄文文化起源論と旧石器終末期研究の学説史に着目して－．論集忍路子 I，57-73，忍路子研究会.
長沼正樹・佐野勝宏（2003）川口町荒屋遺跡採集の両面調整石器．越佐補遺些－えっさほいさ－，8，9-11.
長崎潤一（2000）リダクション．安斎正人編「用語解説現代考古学の方法と理論 III」：234-240，同成社.
長崎潤一（2004）総論　特集石器変形論．考古学ジャーナル，512，2-3.
永塚俊司（1997）荒屋系細石刃石器群における一つの定点.「人間・遺跡・遺物３」：90-117，発掘者談話会.
中村孝三郎（1965）中土遺跡．60 p，長岡市立科学博物館.
中村孝三郎・小林達雄（1984）月岡遺跡．麻生優ほか編「日本の旧石器文化２遺跡と遺物〈上〉」：242-254，雄山閣.
永塚俊司(2003)南関東地域の細石刃文化．堤隆編「シンポジウム日本の細石刃文化 I －日本列島における細石刃文化－」：184-233，八ヶ岳旧石器研究グループ.
中沢祐一(2006)遺物空間分布．厚真町教育委員会「上幌内モイ遺跡 (1)」：131-139.
新潟石器研究会（1996）新潟県中土遺跡出土遺物の再検討．長岡市立科学博物館研究報告，31，123-158.
野口　淳（2005）旧石器時代遺跡研究の枠組み－いわゆる「遺跡構造論」の解体と再構築－．　旧石器研究，1，17-37.
大場正善（2003）東北地方南部の細石刃文化．堤隆編「シンポジウム日本の細石刃文化 I －日本列島における細石刃文化－」：72-98，八ヶ岳旧石器研究グループ.
大平山元 I 遺跡発掘調査団編（1999）大平山元 I 遺跡の考古学調査－旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の探求－．144 p，大平山元 I 遺跡発掘調査団.
帯広市教育委員会（1988）帯広・暁遺跡３，90p.
帯広市教育委員会（1985）帯広・暁遺跡，206p.
帯広市教育委員会（1986）帯広・暁遺跡２，150p.
岡山大学文学部考古学研究室（1996）恩原２遺跡，362p＋PL24.
小野　昭(2001)文化の広がりの重層性と比較の方法.「打製骨器論－旧石器時代の探求－」：11-19，東京大学出版会.
小野　昭（2006）B 地点の性格と居住類型．小野昭編「平成 16・17 年度科学研究費補助金基盤研究 C 研究成果報告書　信濃川中流域における旧石器時代の居住類型と石材環境」：35，首都大学東京考古学研究室.
織笠　昭（1979）中部地方北部の細石器文化．駿台史学，47，81-98.
大塚和義（1968）本州における湧別技法に関する一考察．信濃，20(4)，1-10.
大山　柏（1940）再生器具．史前學雜誌，12(2)，47-75.

埼玉県埋蔵文化財調査事業団（1993）川本町白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡，249 p.
佐久市教育委員会（2006）天神尾根遺跡，192p.
桜井準也（1993）細石刃文化遺跡と河川次数－内水面漁撈を考える－．堤隆編「シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ－細石刃文化研究の諸問題－」：252-266，佐久考古学　会・八ヶ岳旧石器研究グループ.
桜井美枝（1992）細石刃石器群の技術構造－山形県角二山遺跡の分析.「加藤稔先生還暦記念　東北文化論のための先史学歴史学論集」，441-462.
山武郡市埋蔵文化財センター（1994）大網山田台遺跡群Ⅰ－旧石器時代篇－，421p.
佐野勝宏（2002）北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態．考古学研究，49(1)，38-58.
佐野勝宏（2003）北方系細石刃石器群の移動形態．堤隆編「シンポジウム日本の細石刃文化Ⅱ－細石刃文化研究の諸問題－」：122-131，八ヶ岳旧石器研究グループ.
佐藤宏之（1992）北方系削片系細石器石器群と定住化仮説－関東地方を中心に－. 法政大学大学院紀要，29，55-83.
佐藤宏之（1995）技術的組織・変形論・石材受給－下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察－．考古学研究，42(1)，27-53.
佐藤宏之（2003）細石刃石器群研究のパースペクティブ．堤隆編「シンポジウム日本の細石刃文化Ⅱ－細石刃文化研究の諸問題－」：276-280，八ヶ岳旧石器研究グループ.
芹沢長介（1959）新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について (予報)．　第四紀研究，1(5)，174 -181.
島田和高・山科　哲（1998）明治大学考古学博物館収蔵資料 (旧石器) の再整理・再評価－北海道置戸安住遺跡 B・C 地点の細石刃製作工程と遺跡での作業内容－．明治大学博物館研究報告，3，23-67.
島田和高（1999）槍先形尖頭器の製作と黒耀石原産地.「第 7 回岩宿フォーラム／シンポジウム岩宿発掘 50 年の成果と今後の展望予稿集」：62-69，笠懸村教育委員会・岩宿フォーラム実行委員会.
白石典之（1993a）北東アジアの細石刃石器群－技術より見た時間・空間的変遷とその背景－．　筑波大学先史学・考古学研究，4，1 -27.
白石典之（1993b）北海道における細石刃石器群の展開．物質文化，56，1-22.
白滝団体研究会・地学団体研究会（1963）白滝遺跡の研究，72p.
鈴木宏行（2003）原産地遺跡における細石刃石器群の技術構造－上白滝 8 遺跡の分析を通して－．堤隆編「日本の細石刃文化 III －細石刃文化研究の諸問題－」：1-17，八ヶ岳旧石器研究グループ.
高原要輔・淺川文雄（2002）福島県会津若松市笹山原 No.27 遺跡.「第 16 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集」，93-96.
髙倉　純（1999）遺跡間変異と移動・居住形態復元の諸問題－北西ヨーロッパと日本における研究動向－．日本考古学，7，75-93.
髙倉　純（2000）北海道北見市吉井沢遺跡 B 地点出土細石刃石器群の再検討－忍路子型細石刃核を組成する石器群の石器製作工程と石器製作作業の復元－．北海道旧石器文化研究，　5，1-34.
髙倉　純（2003）北海道の更新世末における石材消費形態からみた遺跡間変異の検討．堤隆編「シンポジウム日本の細石刃文化Ⅱ－細石刃文化研究の諸問題－」：132-151，八ヶ岳旧石器研究グループ.
髙倉　純（2005a）旧石器時代遺跡形成過程研究の問題点．明治大学文学部考古学研究室編「地域と文化の考古学Ⅰ」：333-347，六一書房.
髙倉　純（2005b）十勝平野周辺域における石器石材の分布と産状 (1) －白糠丘陵南縁部厚内層群産出の珪質堆積岩－．帯広百年記念館紀要，23，25-34.
田村　隆（1993）野辺山を視る眼－石器の行動理論構築に向けて－．堤隆編「シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ－細石刃文化研究の諸問題－」：280-298，佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ.
寺崎康史（1999）北海道細石刃石器群理解への一試論．先史考古学論集，8，71-88.
寺崎康史（2006）北海道地方の地域編年．安斎正人・佐藤宏之編「旧石器時代の地域編年研　究」：275-314，同成社.
東北大学文学部考古学研究室・川口町教育委員会（1990）荒屋遺跡－第 2 ・ 3 次発掘調査概報－，47p.
東北大学大学院文学研究科考古学研究室・川口町教育委員会（2003）荒屋遺跡－第 2 ・3 次発掘調査報告書－，106p.
十勝考古学研究所（1989）帯広市暁遺跡の発掘調査－第 5 次調査報告書，132p.
立木宏明（2003）中部地方北部地域の細石刃文化.

堤隆編「シンポジウム日本の細石刃文化 I －日本列島における細石刃文化－」：99-127，八ヶ岳旧石器研究グループ.
筑波大学遠間資料研究グループ編（1990）湧別川－遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録－. 233p，遠軽町教育委員会.
津南町教育委員会（2002）正面中島遺跡，209p.
鶴丸俊明(1979)北海道地方の細石刃文化．駿台史学，47，23-50.
堤　隆（1996）削片系細石刃石器群をめぐる技術的組織の異相－中ッ原細石刃石器群を中心として－. 古代，102，36-61.
堤　隆編（2003）シンポジウム日本の細石刃文化 I －日本列島における細石刃文化－．415p．八ヶ岳旧石器研究グループ.
堤　隆（2005）最終氷期末における内水面漁撈の導入をめぐって. 佐藤宏之編「食糧獲得社会の考古学」：50-71，朝倉書店.
上野秀一・加藤　稔（1973）東北地方の細石刃技術とその北海道との関連について．北海道考古学，9，25-49.
宇野修平・上野秀一（1984）角二山遺跡．麻生優ほか編「日本の旧石器文化 2 遺跡と遺物〈上〉」：96-111，雄山閣.
ワシリエフスキー，A．A.（木村英明訳）（2006）サハリンと日本の旧石器文化．考古学ジャーナル，540，19-24.
山田晃弘（1986）北海道後期旧石器時代における石器製作技術構造の変遷に関する予察．考古学雑誌，71(4)，1-29.
山田和史（2005）細石刃石器群前半期の石材獲得戦略－特に北海道西部の頁岩原産地について－. Aru:k，1，65-78.
山田昌久・白石典之（1990a）石器製作技術系の設定と幌加沢遺跡遠間地点の石器．筑波大学遠間資料研究グループ編「湧別川－遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録」：71-143，遠軽町教育委員会.
山田昌久・白石典之（1990b）幌加沢遠間地点石器製作技術系の摘出と「細石刃文化期」石器製作技術体系への構図．筑波大学遠間資料研究グループ編「湧別川－遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録」：215-222，遠軽町教育委員会.
山田　哲（1999）北海道の前半期細石刃石器群についての研究－常呂郡訓子府町緑丘 B 遺跡石器群の再検討－．先史考古学論集，8，1-70.
山田　哲(2006)北海道における細石刃石器群の研究．244p，六一書房.
大和市教育委員会（1986）月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点．752p.
大和市教育委員会（1991）長堀北遺跡, 本文編 81 p，資料編 109 p＋PL21.
山原敏朗（1998）北海道の旧石器時代終末期についての覚書き．北海道考古学，34，77-92.
山原敏朗（2000）十勝平野における細石刃核の変形について－帯広市上似平遺跡 A ブロックの接合資料から－．北海道旧石器文化研究，5，43-53.
山科　哲(2004)関東以北の細石刃石器群の遺跡構成．堤隆編「シンポジウム日本の細石刃文化 III －細石刃文化研究の諸問題－」：18-38，八ヶ岳旧石器研究グループ.
八ヶ岳旧石器研究グループ（1991）中ッ原第 5 遺跡 B 地点の研究 II，230p.
八ヶ岳旧石器研究グループ（1995）中ッ原第 1 遺跡 G 地点の研究 I，128p.
吉崎昌一（1959）札滑遺跡－北海道における small-blade industry の発見－．北海道学芸大学考古学研究会連絡誌，18，84-88.
吉崎昌一（1961）白滝遺跡と北海道の無土器文化．民族学研究，26(1)，13-23.
湯沢町教育委員会（1988）大刈野遺跡，116p.
Zaitsev,V.I., Vasilevski, A.A.et al. 2002 New Investigation of Sokol － the site of the Upper Paleolithic-Incipient Neolithic in Sakhalin －．北海道旧石器文化研究，7，1-14.

A Case Study of Biface Reduction (1): The Microblade Assemblages with the Sakkotsu Type Microbladecores

Masaki Naganuma

Investigation Group for Archaeological Site, Meiji University.
Wakamatsu-cho 5-6-1, Fuchu-shi, Tokyo, 183-0005, Japan.